二松学舎大学大学院文学研究科・大阪大学大学院基礎工学研究科
株式会社 国際電気通信基礎技術研究所（ATR）

「漱石アンドロイド」プロジェクト
2021 年度 共同研究報告書

二松學舍大學 NISHOGAKUSHA UNIVERSITY
大阪大学 OSAKA UNIVERSITY
ATR Advanced Telecommunications Research Institute International

Contents　目　次

04 「漱石アンドロイド」運用経緯と研究の動向（2021年度）
学校法人二松学舎　常任理事　西畑 一哉

08 2021年度研究活動の概要
二松学舎大学大学院文学研究科教授　山口 直孝

10 偉人アンドロイドをめぐる問題―アバター社会―
大阪大学大学院基礎工学研究科教授　石黒 浩

12 ガチャの「文豪猫」と漱石アンドロイド
漫画批評家　夏目 房之介

14 漱石アンドロイドが漱石の言葉を現代に届ける試み
二松学舎大学文学部教授　改田 明子
大阪大学大学院基礎工学研究科特任准教授　高橋 英之

16 過去の文豪のメッセージを伝えるメディアとしてのロボットの可能性
大阪大学大学院基礎工学研究科特任准教授　高橋 英之
大阪大学大学院基礎工学研究科特任講師　伴 碧
大阪大学大学院基礎工学研究科助教　内田 貴久

20 もう一人の夏目漱石――パペットロボットの導入
二松学舎大学大学院文学研究科教授　山口 直孝

22 渋沢大河ドラマと漱石アンドロイド
二松学舎大学大学院文学研究科教授　島田 泰子

26 アンドロイドとファンアートが描く世界
二松学舎大学大学院文学研究科教授　塩沢 一平

28 なぜわたしたちは漱石アンドロイドを「漱石先生」と呼ぶのか
二松学舎大学文学部専任講師　谷島 貫太

30 漱石アンドロイド演劇動画の授業活用について
二松学舎大学大学院文学研究科教授　瀧田 浩

32 「漱石アンドロイド研究室」の設置
二松学舎大学大学院文学研究科教授　山口 直孝

34 コロナ禍のアンドロイドサークル――オンラインの可能性
二松学舎大学大学院文学研究科助手　伊豆原 潤星

36 漱石アンドロイドの中からの視点
二松学舎大学文学部学生（漱石アンドロイドサークル）　二木 潤

「漱石アンドロイド」運用経緯と研究の動向（2021 年度）

学校法人二松学舎
常任理事　西畑 一哉

1．漱石アンドロイドの作成経緯

二松学舎では、創立140周年記念事業として、二松学舎の卒業生であり、2016年に没後100年、2017年に生誕150年を迎えた夏目漱石を、アンドロイドとして甦らせる「漱石アンドロイドプロジェクト」を立ち上げた。本学が教育目標に掲げる「国語力」の象徴である夏目漱石をモデルに、大阪大学大学院基礎工学研究科石黒浩教授監修の下、漱石のデスマスクや写真等多くの資料を保持する朝日新聞社、夏目漱石の孫である夏目房之介氏（アンドロイドの音声を作成するために不可欠な「音素登録」者）の協力を得て、漱石アンドロイドを作成し、2016年12月8日に完成した。

2．その後の漱石アンドロイドの活用（主な動き）

（1）2016年度の動き

2016年度は、12月8日に完成披露の記者会見を行い、その席では、漱石アンドロイドが、自己紹介と『夢十夜』の「第一夜」朗読を披露した。翌12月9日は漱石の没後100年に当たったが、NHKの「おはよう日本」に出演した。また、民放各社の報道番組でも漱石アンドロイドの制作が紹介された。

（2）2017年度の動き

2017年4月14日から16日の3日間、アサヒビール大山崎山荘美術館において、漱石アンドロイドの朗読講演を実施した。初めて長距離となる出張を行った。大山崎山荘美術館では、延べ900人の参加者が非常に熱心に聴講していた。

11月23日から26日の4日間、愛媛県松山市で開催された夏目漱石生誕150周年記念イベントに漱石アンドロイドが出演した。松山市長表敬訪問を皮切りに、松山東高校（元漱石が勤務した尋常中学校）での講演、済美平成中等教育学校での講演、坂の上の雲ミュージアム等でのイベントに参加した。中でも、松山東高校での熱狂的な歓迎ぶりは印象的であった。

（3）2018年度の動き

2018年8月26日に、二松学舎大学で「誰が漱石を甦らせる権利をもつのかー偉人アンドロイド基本原則を考える」とのテーマでシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、研究者による講演のほか世界的な劇作家平田オリザ氏作・演出のアンドロイド演劇『手紙』が初演された。『手紙』は漱石アンドロイドと子規役の人間が対話しながら進める演劇であった。

また、漱石の孫である夏目房之介氏、大阪大学大学院基礎工学研究科の石黒浩教授、平田オリザ氏、著作権に詳しい弁護士の福井健策氏、谷島貫太二松学舎大学文学部専任講師により、漱石アンドロイドの人格権を巡る議論が活発に行われた。この議論等の模様は、『アンドロイド基本原則』という著書にまとめられている。

10月20日にNHKBSプレミアム「天国からのお客さま」という番組が放映され、漱石アンドロイドは、芥川賞作家の奥泉光氏、作家のいとうせいこう氏に対して、夏目漱石の『文学論』を解説するという役回りを演じた。

（4）2019年度の動き

2019年5月18日、日暮里にある羽二重団子本店の本店リニューアルに合わせ、漱石アンドロイドによる講演を実施した。この店は『吾輩は猫である』にも登場する子規庵近くの団子屋で、作品内では「芋坂の団子屋」と記されている。このイベントについては、学生による「漱石アンドロイド研究会」が音声作成技術の習熟につとめ、アンドロイド操作を主体的に行うなど、活発に活動した。

10月26日TBSの「世界ふしぎ発見!」に漱石アンドロイドが出演した。

11月9日、二松学舎大学で「アンドロイドに魂は宿るか　漱石アンドロイドを巡る3つの視点」とのテーマでシンポジウムを開催。オープニングで脚本家佐藤大氏（「攻殻機動隊」「交響詩篇エウレカセブン」等の脚本家）によるアンドロイド・モノローグを上演。夏目房之介氏、大山顕氏（写真家）、菊地浩平氏（日本学術振興会特別研究員・早稲田大学非常勤講師※当時）、小山虎氏（山口大学時間学研究講師・大阪大学石黒研究室招へい教員※当時）、佐藤大氏、島田泰子二松学舎大学文学部教授、足立元二松学舎大学文学部専任講師による活発な討議が行われた。

3．2020年度の動き

（1）新型コロナウイルス感染拡大の影響と漱石アンドロイド渋沢栄一アンドロイドの競演

2020年度は2月から新型コロナウイルスの感染拡大が続き、大学・両附属高校・附属中学校いずれでも、卒業式・入学式ともに取り止めもしくは大幅縮小となったほか、大人数が集合する式典や会議も中止された。この結果、漱石アンドロイドを活用する場も大幅に制限されることとなった。

こうした中でも、2020年12月12日に二松学舎大学で開催（リモート開催）された、朝日教育会議2020「渋沢栄一『論語と算盤』から生まれる未来」において、漱石アンドロイドと渋沢栄一のアンドロイドの共演が実現した。

渋沢栄一は、紡績・金融・電力・保険等500以上の企業の立ち上げを行い、商工会議所を設立するなど「近代日本資本主義の父」とも言われる巨人だが、商法講習所（現一橋大学）、日本女子大学校（現日本女子大学）の経営・支援など、教育分野でも大きな足跡を残している。

特に、二松学舎の学祖である三島中洲とは、渋沢の妻の墓碑銘を三島が撰文するなど個人的に極めて親しかった。また思想的にも、三島の「義利合一論」と渋沢の「道徳経済合一説」は同根ともいえるものであり、渋沢の代表作『論語と算盤』も三島と渋沢の対話から書き始められている。こうしたこともあり、渋沢は三島没後、二松学舎の第三代舎長に就任し、漢学塾の後進である二松学舎専門学校の設立に奔走するなど、二松学舎にとっては恩人ともいえる重要な人物である。

前述の朝日教育会議2020に先立って、2019年7月に深谷市の副市長と教育委員長が二松学舎を来訪され、漱石アンドロイドの運用状況を見学された。深谷市は渋沢栄一の生まれ故郷である。深谷市では、郷里の偉人である渋沢栄一のアンドロイドを制作し、渋沢栄一記念館等で活用する計画を立てており、「偉人アンドロイド」の「先駆」である漱石アンドロイドの運用状況を実見することが目的であった。

深谷市では、同市出身の鳥羽博道氏（株式会社ドトールコーヒー名誉会長）が制作資金を寄付、漱石アンドロイドと同様に大阪大学大学院基礎工学研究科石黒浩教授監修の下、株式会社エーラボが制作することとなった。

このような経緯もあり、朝日教育会議2020「渋沢栄一『論語と算盤』から生まれる未来」において、二松学舎の卒業生である夏目漱石のアンドロイドと二松学舎第三代舎長である渋沢栄一のアンドロイドの共演が実現した。アンドロイドの共演という新しい方式によるメッセージの伝達という可能性を示すことができたように思う。重ねて、二松学舎の恩人ともいうべき渋沢栄一の深い恩顧・縁を感じた次第である。

渋沢栄一アンドロイドと漱石アンドロイドの共演

（2）NHK松山放送局開局80周年番組への出演

2021年3月13日、漱石アンドロイドが、NHK松山放送局開局80周年番組への出演のため、松山に出張した。漱石アンドロイドは2017年11月にも松山を訪れ、松山東高校（旧尋常中学校　漱石の『坊っちゃん』の舞台）等での講演を行っており、今回は2度目の松山訪問となった。NHK松山放送局開局80周年記念番組では、漱石アンドロイドは司会者やイベント参加者との会話を行い、イベント参加者には大変好評であった。NHK松山放送局開局80周年番組は2021年4月11日に放送された。

4．2021年度の動き

（1）対がん協会とのコラボレーション

2021年度も依然として新型コロナウイルスの蔓延は続き、漱石アンドロイドの活動にも引き続き大きな制約が生じた。こうした中で、公益財団法人日本対がん協会とのコラボレーションが実現した。11月13日に二松学舎大学附属柏中学校において、中学生を前に、山王病院副院長の奥仲哲弥医師と漱石アンドロイドががん予防や検診の重要性をめぐって、対話を繰り広げた。2020年からの新型コロナウイルスの感染拡大の影響から、人間ドック等におけるがん検診の動きが極端に鈍っており、このままでは数年後にがん患者の急増を招きかねないとの懸念があり、対がん協会として、がん検診を積極的に呼びかける必要があったものである。

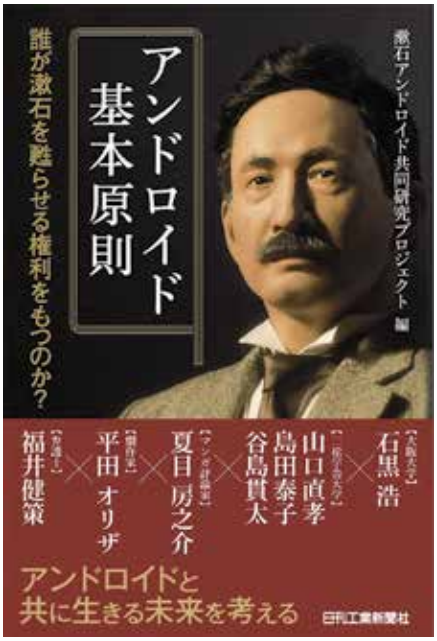
附属柏中学生を前にした奥仲哲弥医師と漱石アンドロイドの対談

（2）『アンドロイド基本原則』に関する教科書の掲載について

2018年8月26日に、二松学舎大学で「誰が漱石を甦らせる権利をもつのかー偉人アンドロイド基本原則を考える」とのテーマで開催されたシンポジウムの模様は、『アンドロイド基本原則』という著作にまとめられているが、このうち、谷島貫太二松学舎大学文学部専任講師の文章が、高校の国語の教科書（東京書籍・現代国語）に掲載された。

また、同じシンポジウムにおいて、劇作家平田オリザ氏作・演出の舞台『手紙』を本学で上演したが、その際の画像についても、高校の教科書（大修館書店・文学国語）への掲載が決まっている（2023年4月から使用開始）。

現在の中高生が成人し、社会人として活躍する頃には、AI・アンドロイドが、日常生活や企業活動に幅広く浸透していることが予想される。そういった社会における、「人間とアンドロイド」「人間とAI」の在り方を探る意味で、重要で普遍的なテーマとなっていくのではないだろうか。



『アンドロイド基本原則』

2021年度研究活動の概要

二松学舎大学大学院文学研究科
教授　山口 直孝

アフターコロナを見すえた模索

2021年度は、前年度に引き続き新型コロナウイルスの影響が大きかった。二松学舎大学では、対面とオンラインとの併用形態で授業を行い、感染防止のために入構制限を設けた。学生は隔週ごとの登校、関係者以外の施設立ち入りは禁止された。感染者数の減少が見られた2021年10月には、活動方針がやや緩和され、心理実験やアンドロイドサークルの活動を再開したが、感染の第六派の到来に伴い、再び中断を余儀なくされたものが多い。

パンデミックによる行動抑制は、さまざまな変化をもたらした。オンラインでのやり取りが増え、人との関係にも以前とは異なる局面が現われている。事態が収束しても、社会のありようが感染前に戻ることはおそらくないであろう。漱石アンドロイドは、対面での接触を想定した人型ロボットであるが、アフターコロナの状況を見すえて、オンラインでの活用を工夫していかなければいけない。制約を強いられる中での模索で得られたのは、複数の回路で事業を展開していくことについての感触であった。以下、本年度の成果を略述する。

①、心理実験の実施

漱石アンドロイドを用いた受容実験を二種類実施した。いずれも、漱石アンドロイドとほかのロボットとを比較し、発話が受容者に与える影響を測定するものである。夏目漱石の実際の発言を被験者に対する助言として紹介し、どのように理解されるかを追跡した。

一つは、漱石アンドロイドとミニロボットとを対照させたものである。2019年度に一度試みたが、ミニロボット条件を実施したところで新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、延期を余儀なくされた。今回は、前回の経験を踏まえて、被験者に発話が伝わりやすいよう導入部を工夫し、反応をより具体的に把握することを目指して、アンケートの文言にも修正を加えた。ミニロボットはヴィストン社製のパペットロボットに変更し、漱石アンドロイドと同じ音声を用いることで同一条件の精度を高めた。あいにく漱石アンドロイド条件を実施したところで第六波の感染拡大があったため、ミニロボット条件は見合わせている状況である（2022年2月28日現在）。ミニロボットの外見は、デフォルメされているが、漱石の記号性を保持しており、実験からは、漱石らしさとは何かを考察する手がかりも得られよう。

もう一つは、漱石アンドロイドと同じ人型タイプの男性アンドロイドとを組み合わせたものである。こちらの実験では、初めてオンライン調査を導入した。対面実験の経験を踏まえて漱石の名言は短いものを選び、四種類を用意した。漱石アンドロイドの声を男性アンドロイドにも用い、動作や視線も同じように感じられることを心がけた。背景も含めて条件を揃えることができたのは、漱石アンドロイドの固有性を見極める目的から見ても、大きな前進であった。オンラインの場合は、千を超える反応を容易に集めることができる。感染症の影響を考慮する必要がないため、今後も継続的に実施することを検討している。なお、実験に関連して、パペットロボット一体を新たに二松学舎大学で購入した。実験だけでなく、広報などを含めた活用をしていく予定である。（本報告書14〜19ページ参照）

②、授業での活用

オンライン、対面の併用形態が続いたため、2021年度は漱石アンドロイドを用いた体験型授業は実施を見合わせた。例年国文学科一年生必修の日本文学概論の時間を使って行っている特別授業（漱石アンドロイドによる話、『夢十夜』の朗読）は好評であり、アンドロイドサークルの活動紹介の場としても重要であるが、条件が整わなかった。代わりに、プロジェクトに関わる教員が、担当科目で過去の取り組みを専門領域と関わらせて取り上げた。具体的には、瀧田浩教授に

よる日本文学講読入門①（夏目漱石）におけるアンドロイド演劇『手紙』の鑑賞、島田泰子教授による文学入門における対話ストラテジーの検討、山口による日本文学概論における漱石アンドロイド制作過程の紹介が挙げられる。

全面的な対面授業が再開した時点で体験型授業を実施することは当然であるが、教材として使える動画や資料を作成し、蓄積していくことが望まれる。個々の教員の取り組みをそれぞれが共有し、漱石アンドロイドを用いた教育が目指すところについて、共通認識を形成していくことが大切であろう。（本報告書30〜31ページ参照）

③、『偉人アンドロイド原則』の国語教科書における教材採用

2018年8月26日に開催したシンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？　偉人アンドロイド基本原則を考える」を書籍化した漱石アンドロイド共同研究プロジェクト編『アンドロイド基本原則　誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』（日刊工業新聞社、2019年1月28日）収録の谷島貫太専任講師「人がアンドロイドとして甦る未来」が国語教科書『精選　現代文B』（三省堂）に2022年度から採用されることになった。文学教育への活用を目的の一つとして掲げているプロジェクトの研究成果が高校の国語教科書に収録されるのは喜ばしい。当該教科書で学ぶ高校生への働きかけ（漱石アンドロイドの出張講義の実施など）や指導教材開発（朗読動画の提供など）への協力を通じて、学びの場をより活性化することを目指したい。

④、「漱石アンドロイド研究室」の設置

2022年度より九段キャンパス1号館10階1004研究室を共同研究プロジェクトで使用することが可能になった。2022年5月27日より、漱石アンドロイドは同研究室に設置されている。拠点が確保できたことによって、音声作成や実験準備などの準備が容易になり、個人を対象とした実験やイベントを行うことも可能になった。漱石アンドロイドは、「二松学舎大学特別教授　夏目漱石」の一面も持つため、アンドロイドサークルの協力の下、漱石先生の研究室としても通用する部屋作りを進めている。朗読動画の作成も、本研究室を使って作成した。（本報告書32〜33ページ参照）

⑤、日本対がん協会講演会での登壇

イベント出演としては、11月13日に二松学舎大学附属柏中学校2年生を対象とした日本対がん協会講演会での登壇があった。総合学習の一環として行われたもので、漱石アンドロイドは、国際医療福祉大学教授の奥仲哲弥氏の講演の司会および対談の相手を務めた。啓発活動に関わるのは初めてであり、活動領域の幅がさらに拡がったと言える。漱石については胃潰瘍や神経症など、さまざまな病で苦しんだことがよく知られている。漱石アンドロイドが自身の心身の弱さを語るのは初めてであり、イメージ形成の上で新しい一面を付け加える試みであった。伝記的な事実との齟齬がないよう、また、イメージを損なわないよう、台本作成にあたっては増田裕美子教授が監修を務めた。奥仲氏との対談は、2022年2月より、インターネット上に公開されており、視聴することができる（https://www.jcancer.jp/cancer-education/material12.html）。

⑥、アンドロイドサークルの活動

アンドロイドサークルは、9月末より本格的な活動を再開した。伊豆原潤星研究助手の助言の下、『夢十夜』「第六夜」など、新しい音声プログラムおよび『こころ』朗読動画の作成に取り組んだ。朗読動画については、You Tubeで公開し、高等学校国語の授業資料ほかで活用してもらう予定である。①の実験や④の研究室の設置にも積極的に関わり、また、前年度は見合わせたサークルへの勧誘活動も再開した。

アンドロイドサークルが設立されたのは、2017年である。創設時のメンバーの多くは、すでに卒業し、社会人となっている。アンドロイドの操演や音声プログラムの作成などの技術、イベント実施の際の要領などについて蓄積された知をどのように後の世代に伝えていくかが課題となっている。ミーティングの際には、ふり返りや引き継ぎにも重点を置いた。（本報告書34〜37ページ参照）

対面心理実験を行う漱石アンドロイド（2021年12月）

偉人アンドロイドをめぐる問題
―アバター社会―

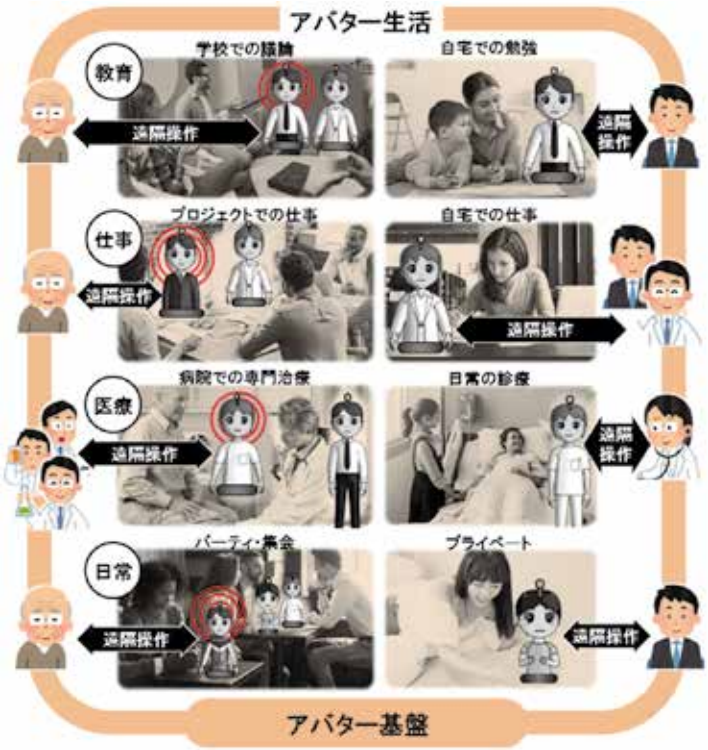
大阪大学大学院基礎工学研究科
教授　石黒 浩

2020年度に始まった、国立研究開発法人科学技術振興機構のムーンショット型研究開発事業［ムーンショット2020］は、7つの目標からなる。その事業の目標1は、「2050年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現する」である。 著者はこの目標1のプロジェクトマネージャーの一人として研究開発に取り組んでいる。もう少し詳しく説明すると次の通りである。

「少子高齢化が進展し労働力不足が懸念される中で、介護や育児をする必要がある人や高齢者など、様々な背景や価値観を有する人々が、自らのライフスタイルに応じて多様な活動に参画できるようにすることが重要であり、そのために、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現することが必要である。そして、その社会の実現のためには、サイボーグやアバターとして知られる一連の技術を高度に活用し、人の身体的能力、認知能力及び知覚能力を拡張するサイバネティック・アバター（この後はアバターと呼ぶ。人工知能技術と融合した発展したアバターという意味である）技術を、社会通念を踏まえながら研究開発する。」

この目標1の基に著者が目指すのは、「誰もが自在に活躍できるアバター共生社会の実現」である。誰もが、利用者の反応をみて行動するホスピタリティ豊かな対話行動ができる、複数のアバターを自在に遠隔操作して、現場に行かなくても多様な仕事、教育、医療、日常における社会活動に参画できることを実現する。2050年には、場所の選び方、時間の使い方、人間の能力の拡張において、生活様式が劇的に変革するが、社会とバランスのとれたアバター共生社会を実現するというものである。

より具体的なアバター活用の様子を下図に示す。



教育においては、自宅での勉強は教師がアバターで教えてくれる。典型的な指導はアバターの自律機能が行い、想定外の質問は教師が遠隔操作で対応することにより、教師は同時に10台程度のアバターを操作できるようになる。一方、学校には、アバターを用いて世界中から学生が集まり、様々な議論ができるようになる。

仕事においても同様である。自宅にアバターで専門家を招きながら、自宅でできる仕事は自宅で行い、会社では世界中から集まるメンバと共に会議を行う。このような働き方によって、通勤通学を最小限にして、自由に働けるようになる。

医療においては、風邪等の簡単な診察は、医者がアバターを用いて家庭で行う。これにより感染症などの危険性は非常に低くなる。一方街の病院には、様々な専門医がアバターで診察するため、街の小さな病院も総合病院並の機能を持つようになる。そうなると、日常生活においても、対話パートナーとしてアバターを利用するものや、パーティなどにアバターで参加する者も増えてくる。

すなわち、高齢者や障がい者を含む誰もが、多数のアバターを用いて、身体的・認知・知覚能力を拡張しながら、常人を超えた能力で様々な活動に自在に参加できるようになる。何時でも何処でも仕事や学習ができ、通勤通学は最小限にして、自由な時間が十分に取れるようになるのである。

このように、ムーンショット型研究開発事業では誰もが複数のアバターを用いて、様々な自分を表現し自在に活躍する、アバター共生社会の実現を目指す。ここでアバターとは遠隔操作ロボットやCGエージェントを意味し、「自在」とは、アバターが操作者の意図を汲み取りながら、操作者の能力を拡張して活動することにより、操作者が思い通りに活動できる状態を意味する。

特に「自在」という概念は重要である。一人で複数のアバターを利用するには、アバターが自律的にタスクをこなす機能を持つ必要がある。操作者はほぼ自律的に活動するアバターを統括して、必要な時だけアバターを直接操作することで、複数のアバターを同時に利用する。このとき、アバターは操作者の意図を無視して、自律的に活動するのではなく、操作者の意図を汲んで自律的に活動しなければならない。このことを「自在」と呼ぶ。アバターを自在に操作するとは、アバターの自律的なAI機能などをふんだんに用いながら、自分の意図通りに複数のアバターを自在に操作するということである。

そして、無論漱石アンドロイドもアバターとして利用できる。漱石の姿形で子供たちに授業すれば、子供たちも偉人から学ぶという貴重な体験ができる。

ガチャの「文豪猫」と漱石アンドロイド

漫画批評家
夏目 房之介

「文豪猫」

「ガチャ」と呼ばれるものがある。数百円入れて把手を回すとカプセルが落ちてくる、コンビニなどにもあるアレである。次男が、ある日「文豪猫」というシリーズのニャツメとニャワバタの猫人形を持ってきた[1]。ガチャの景品だそうで、他にニャクタガワ、ミニャザワ、ニャザイがある。「ニャツメ」猫は以前の千円札で知られる頬杖をついた肖像が原型。「ミニャザワ」はコートを羽織って「雨ニモ負ケズ」な風情で立っている。「ニャクタガワ」と「ニャザイ」はともに座して頬杖をついているが、後者はやや自堕落に股を広げている。

ここには何層ものイメージが重ねられている。「文豪」という歴史的人物、肖像写真の記憶、猫の擬人化に、巷間連想される作家像のニュアンスを味付けし、「ニャ」の字をはめこんで名付け、キャラ化している。猫でさえあれば「かわいい」親密さは保証されるので、最低限の人気は確保できそうだ。漱石は『吾輩は猫である』の作者で、日本で一番有名な文豪だし、文豪物ゲームでもラスボス扱いらしいので、ここをクリアすれば、他は多少苦しくてもシリーズ化が可能なのかもしれない。この国では漱石ほど汎用性の高い文豪も少ない。

「擬人化」は、昨今の同人誌やゲームでは、たとえば軍艦や競争馬を少女としてイメージするような形で流通する。生身や実態の存在を少し、あるいは遠く離れ、フィクション化、パロディ化し、比喩の近さと強引さの間合いで消費センスを競う。基本的には「かわいい」親密さの消費欲求を目指しているといっていいだろう。

漱石アンドロイドは何が違うか

漱石アンドロイドも汎用性の高い文豪のキャラ化である。私は〈偉人アンドロイドはパロディ〉であり、〈そこに成立する「人格」は、あくまで「社会」（受容者）が共有し想像・創造する「人格（のようなもの）」である。〉[2]と書いた。精巧に作られ、声まで与えられた（残念なことに私の声なのだが）アンドロイドの実在感ゆえに、あえて強調したのである。これを「文豪猫」の「かわいい」親密さと比べれば、当然権威的な他者性をより強く感じさせる。

二松学舎の島田泰子教授は〈ホンモノに、より似せようと腐心する限り、漱石アンドロイドがミニマムな仕様を実装したサグリョ・タイプ（安価な下位機種）〉にならざるをえず、〈冷ややかな反応〉[3]を招来すると書く。と同時に、2017年松山巡業で、現地の高校生が「漱石先生にお会いできて光栄です!」と声を震わせ感激してアンドロイドに握手を求めたことに胸打たれたという。この種の感激はさすがに「文豪猫」にはなく、アンドロイドならではだろう。またアンドロイド

1 https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000290.000024007.html　PRTIMES「あの文豪たちがかわいらしい猫のフィギュアに…!? カプセルトイ「文豪猫」が11月29日に発売」 株式会社チョコレイト　2021年11月29日 12時00分

2 夏目房之介「「漱石の偶像化」への疑義」 漱石アンドロイド共同研究プロジェクト編『アンドロイド基本原則――誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』日刊工業新聞社　2019年　P.168

3 島田 泰子（二松学舎大学大学院文学研究科）「動詞「よみがえらせる」の特異性と、漱石アンドロイドの「物語」―共同研究プロジェクトの新展開―」「漱石アンドロイド」プロジェクト 2019年度共同研究報告書　P.30-31

に「かわいい」要素がないわけではなく、とくに女性はそう感じる向きもいるが、同時に生々しさに引く人もいる。ここには、他者性と親密さの両義性がある。人はこうした両義性に戸惑うこと自体を娯楽にするのだ。

以前、私を含む複数の人がアンドロイドと対話してみたことがあった。アンドロイドには定型的な問答が用意され、別室で人間がキーボードで会話する。その実験では、想定文章が未熟で、うまく応答が構成できなかった。コミュニケーション研究の専門家に依頼すれば、もう少しましな実験になったと思う。ただ、それでも中には突然「そんなことまで話していいの?」と思うような人生相談を始める人がいると聞いた。それは、むしろ漱石機械という他者だから起こるのかもしれない。問答の内容にかかわらず、勝手にアンドロイドを擬人化し、没入してしまうのだろう。

漱石アンドロイドが完成した消費商品と異なるのは、アンドロイドという器が先にでき、それを使って実験する過程で、最終的にはAI搭載も含めて変化してゆく点にある。つまりアンドロイドという器（メディア）を介してコミュニケーションを積み重ね、そこに生起するものを観察するところに核心がある。コロナウィルスのせいでそのプロセスが頓挫しているのは残念だが、それを忘れてはいけないだろう。

漱石アンドロイドが漱石の言葉を現代に届ける試み

二松学舎大学文学部
教授　改田 明子

大阪大学大学院基礎工学研究科
特任准教授　高橋 英之

漱石アンドロイドは、夏目漱石と外見の同一性を特徴とする人工物である。このような存在から伝えられる漱石の言葉は、人間にどのような影響を与えるのだろうか。ここでは、漱石の名言を1つ取り上げ、その受容と影響について検討した。なお、本実験とともに、比較のために特徴の異なるアンドロイドを用いた実験を行う予定であったが、新型コロナ感染症の感染拡大のために延期となった。本稿では、漱石アンドロイドを用いた実験の一部を報告する。

本研究では、漱石アンドロイドが実験協力者の悩みに対してアドバイスをするという場面を設定し、それが実験協力者にどのような影響を与えるのかということを調べた。アドバイスは、実在する漱石の名言である。漱石アンドロイドのアドバイスを聞いた人は、どのようにその助言を受け取るのだろうか。また、受け取り方によって、漱石アンドロイドのイメージはどのような影響を受けるのだろうか。これらの点について、検討した。

【手続き】

実験協力者は、インターネットで募集された27名の成人である。実験は、以下の手続きにより、一人ずつ実施した。

①事前アンケート（夏目漱石・アンドロイドのイメージ）・悩みの事前確認（アンドロイドに開示してもよい悩みの内容・それについて自分で考えている解決策・解決する自信の評定）

②漱石アンドロイド体験　漱石アンドロイドを配置した実験室に実験協力者は案内され、漱石アンドロイドとのやりとりをするよう求められる。漱石アンドロイドは、実験協力者に対して挨拶した後、悩んでいることを話すよう促し、実験協力者はそれに応じて事前アンケートで書いた悩みを話す。その後、漱石アンドロイドが用意された名言をアドバイスとして発言して、体験は終了する（所要時間3分程度）。

③事後アンケート（漱石アンドロイドとアドバイスの印象、アドバイスについての理解、悩みを解決する自信など）

【結果】

アドバイスの妥当性と解決できる自信の変化（事後－事前）には有意な相関関係は認められず（r=0.27）、妥当なアドバイスだと感じた人ほど解決できる自信が高まるといった直接的な関係は認められなかった。また、事前の自信と事後の自信には高い相関関係（r=0.78）が認められたことから、解決への自信はおもにその悩みの内容に依存しているものと思われる。

さらに、アドバイスの妥当性がアドバイスとアンドロイドの印象に及ぼした影響について検討するために、アドバイスの妥当性に関する7段階評定に基づき、実験協力者から高妥当性群（10名、評定値5～7、平均評定値5.4）と低妥当性群（12名、評定値1～3、平均評定値2.4）を抽出し、評定値の違いを分析した。図1にアドバイスの印象に関する評定値を、図2に漱石アンドロイドの印象評定値を示す。

・アドバイスに関する印象

全体に、高妥当性群は、低妥当性群に比較して、「気分が落ち着いた」、「元気が出た」、「やる気が出た」、「感動した」、「役に立つ」などの肯定的な印象が目立つ。一方、妥当な理解を構成することができなかった低妥当性群は、「がっかりした」、「戸惑った」、「冷たい」、「簡単な」などの否定的印象が顕著である。両群とも、「意外だった」、「示唆に富む」の評定が高くなっているが、高妥当性群は、そこから悩みへのアドバイスとしてふさわしい意味や漱石の意図を推測できた結果として、肯定的な印象につながったものと理解できる。

・漱石アンドロイドの印象

図2の通り、高妥当性群は低妥当性群よりも全体に肯定的な評価となっている。とくに注目すべきは、高妥当性群は低妥当性群より「意識がある」および「感情的だ」と評定している点である。漱石アンドロイドのアドバイスを妥当だと解釈した実験協力者は、漱石アンドロイドを一層人間的な存在として受容していることが示唆される。

・悩みが解決できる自信

悩みが解決できる自信は、高妥当性群が低妥当性群より高い（事前：高妥当性群4.0低妥当性群2.7、事後：高妥当性群5.1低

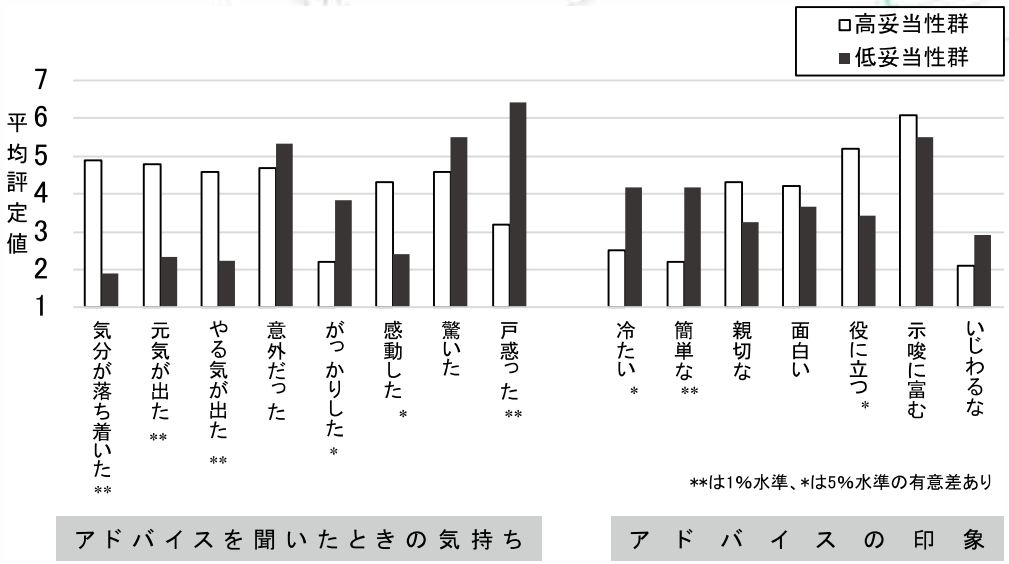


図1　漱石アンドロイドのアドバイスの印象

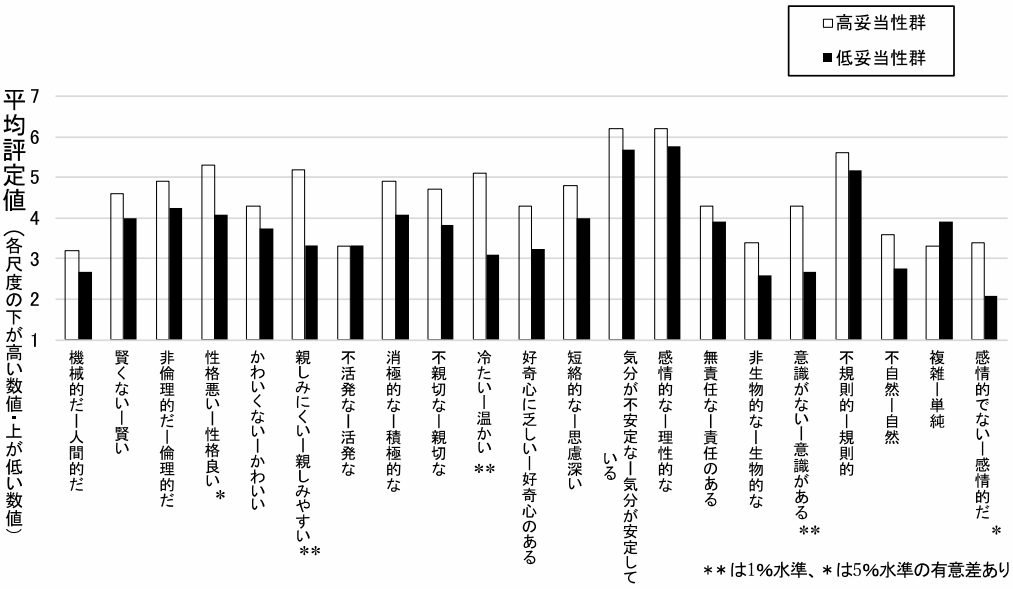


図2　漱石アンドロイドの印象

妥当性群3.0、いずれも1%水準有意 ）。このことから、取り上げた悩みが解決しやすい内容だった実験協力者はアドバイスの妥当な解釈を構成しやすかったことが示唆される。そして、アドバイスの妥当な解釈の成立は、前述のような肯定的感情が実験協力者に生まれることに寄与したものと考えることができる。

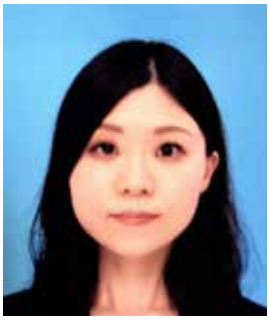
・アドバイスの意図に関する解釈

事後のアンケートの中で、漱石アンドロイドのアドバイスをどのように理解したかに関する質問をしている。アドバイスの解釈（意図）は、妥当性の判断にかかわらず大半の実験協力者が記述しており、未記入もしくはわからないと記述したのは2名のみであった。また、実験協力者が構成した解釈は多様であった。その一部を紹介すると、「答えは周りにある」、「自分らしさを大切にする」、「相手に左右されずに、自分のやるべきことをやっていけば良いということかなと思った」、「自分でしっかり決めろという事かと思いました」などである。それぞれの実験協力者が自分の悩みに関連づけながら、アドバイスを解釈したことが示唆される。これは、人の能動的な解釈構築能力がアンドロイドを前にして発揮されている点で興味深い。

【まとめ】

本研究では、漱石アンドロイドとのやりとりを擬似的な相談場面として設定し、漱石の言葉であるアドバイスがどのように受容・解釈され、それによって漱石アンドロイドのイメージがどのように変化するかということについて検討した。アンドロイドという人工物が、意図の交換をも含んだコミュニケーションの関係に参入する可能性についてアプローチするという点で興味深いテーマである。

過去の文豪のメッセージを伝えるメディアとしてのロボットの可能性



大阪大学大学院基礎工学研究科
特任准教授　高橋 英之

大阪大学大学院基礎工学研究科
特任講師　伴 碧

大阪大学大学院基礎工学研究科
助教　内田 貴久

過去の先人の様々な英知が詰まった言葉は、現代を生きる我々に様々なヒントを与えてくれます。先人の知恵を次の世代に継承していくことは、歴史を糧に未来を紡ぐ上での重要な営みと言えます。このような知恵の継承を考える上で、先人の知恵を如何に効果的に現代の我々に響かせるのか、その言葉を伝える効果的なメディアを考えることは重要です。

心理学において、アインシュタイン効果という現象が報告されています。これは全く同じでたらめな発言をしていても、発言を行った主体が高名な科学者であるとそれを聴く人が信じている場合の方が、そうと信じていない場合よりも、その発言に意味や価値を見出す、というものになります。これは我々が何らかの発言をその言葉の意味だけで純粋に評価しているのではなく、発言者のアイデンティティも込みでその言葉の価値を評価していることを意味しています。すなわち過去の言葉を現代の人達に印象的に届けるためには、同時に話し手の存在をデザインする必要があるのではないかと思われます。

本研究では、過去の著名人を模したロボットは、時代を通じて人々が紡いできた様々な言葉の価値を現在に届ける強力なメディアになるのではないか、そう考え、我々は次のような調査を行いました。本調査では、四種類のロボットが、夏目漱石のものとされる四種類の言葉をそれぞれ喋る動画を用意しました。そして、喋り手のロボットの見た目の違いが、全く同じ夏目漱石の言葉に対する聴き手の印象にどのような影響を与えるのか、オンライン調査によって検討を行いました。

調査に用いたロボットは、夏目漱石アンドロイド、夏目漱石パペットロボット、一般男性アンドロイド、一般男性パペットロボットの四種類（図1）でした（パペットロボットとは、パペット人形が内側の骨格の動力機構によって自律的に動くもの）。この調査の狙いとして、夏目漱石の言葉の話し手が、「漱石というアイデンティティをもっているかどうか」、「話し手がアンドロイドかパペットロボットか」という二つの要因が、それぞれどのように言葉に対する聴き手の印象に影響を与えるのかを調べることを目的としました。

調査は、Yahooクラウドソーシングサービスを通じて募集した協力者978人を対象にオンラインのwebページ上に用意したアンケートフォームを用いて実施しました。調査への協力者は、漱石アンドロイドの動画を視聴する群（241人）、漱石パペットロボットの動画を視聴する群（256人）、一般男性アンドロイドの動画を視聴する群（231人）、一般男性パペットロボットの動画を視聴する群（250人）の4群に振り分けられました。漱石アンドロイドと漱石パペットロボットの群では、

自らの言葉を紹介する、という体で漱石の言葉が紹介されました。それに対して一般男性アンドロイドと一般男性パペットの群では、漱石とは無関係なロボットが漱石の言葉を紹介する、という体で漱石の言葉が紹介されました。この調査では、夏目漱石自体の印象（e.g. どれだけ知っているのか、どれだけ尊敬しているのか）を調査の開始時に、聴いた言葉の印象（e.g.どれだけ共感・感動したか）を動画ごとに、動画中のロボットの印象（e.g. どれだけ尊敬できるのか、どれだけ愛らしいか）を調査の終了時にそれぞれ7段階のリッカート尺度で尋ねました。調査内の動画で紹介する言葉として、「無闇にあせってはいけません。ただ牛のように図々しく進んでいくのが大事です。」など漱石が述べたり、書いたりした言葉を四種類用意しました。

図2は、動画中のロボットに対する印象の平均値のグラフです（抜粋）。これをみるとパペットロボットは漱石であろうとなかろうと、漱石アンドロイドに匹敵する「尊敬できる」という印象を調査の参加者に与えているのに加え、アンドロイドと比較してパペットロボットは「愛らしい」という印象を強く参加者に与えていることが分かりました。

図3は、群ごとの言葉に対して参加者が抱いた印象の一例になります。図3左は、話された言葉とロボットの見た目の印象の一致の度合になります。この結果から、漱石アンドロイドが話し手の群において、最もロボットの見た目と漱石の言葉と一致した印象を参加者は感じたことが分かります。この点から、漱石アンドロイドは、漱石の言葉を伝えるメディアとして優れていることが分かります。一方、興味深いことにロボットが漱石かどうかに関わらず、言葉そのものに対する印象や、言葉からどれだけ自分が物事を考えたのか、などといったスコアに関しては、アンドロイドが話し手の場合よりも、パペットロボットが話し手の場合の方が高い値になることが分かりました。

言葉に対しての印象を向上させるパペットロボットの性質を明らかにするために、ロボットに対して参加者が抱いた印象と、ロボットが発した言葉の印象のスコア間の相関係数を求めました（図4）。その結果、「ロボットが尊敬できる」というスコアと、言葉に対するポジティブな印象の間に正の相関がみられたのに加え、「ロボットの愛いらしさ」のスコアと言葉の印象の間に正の相関が、「ロボットの怖さ」のスコアと言葉の印象の間に負の相関が見出されました。この結果は、アンドロイドが時として人間に感じさせる「怖さ」は言葉に対する良い印象を低減させてしまっている一方、ロボットの「愛らしさ」という要素は、ロボットが語る言葉に対するポジティブな印象を促進することを示唆しています。

今回の調査の結果は、過去の偉人の言葉を現在に伝えるメディアとして、その偉人の外見を写実的に模したアンドロイドには言葉と見た目の一致をつくる価値がある一方、パペットロボットのように、尊敬されるだけではなく愛らしいデフォルメされたロボットにも言葉を伝えるメディアとして可能性があることを示唆するものでした。一方、「尊敬」と「愛らしい」という感情はトレードオフな関係であることが多く、過去の人物のアイデンティティを引き継ぎつつ、「尊敬」と「愛らしさ」を共存させたロボットをどのようにデザインすればいいのか、そのことについて考えることは、より強力なメディアとしてロボットを発展させる上で重要な課題になるのではないかと考えています。

我々が、「尊敬」と「愛らしさ」を両方備えたメディア性が高いロボットをつくりだす鍵として、ロボット単体の見た目や振る舞いを変えるだけでは駄目で、同時にロボットが継承している「文化」というものを、人間が知覚する必要があると考えています。すなわち、マクロの文化的側面においては「尊敬」を人間に感じさせる一方、ミクロの対人的な側面においては「愛らしさ」を人間に感じさせることで、この一見トレードオフ関係にある二つの要素を、一つのロボットに兼ね備えさせることが可能になるのではないかと今回の調査から仮説を立てることができました（図5）。今後、この仮説についてより実証的に掘り下げていきたいと思います。

図 1 . 実験で用いた4種類のロボット

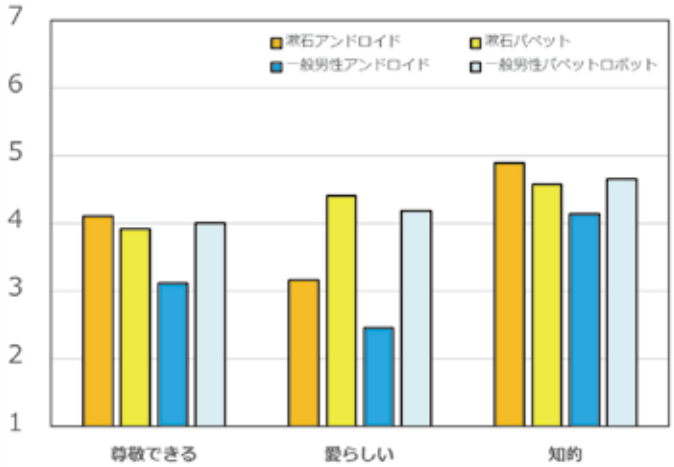


図2. 実験で用いた4種類のロボットの印象

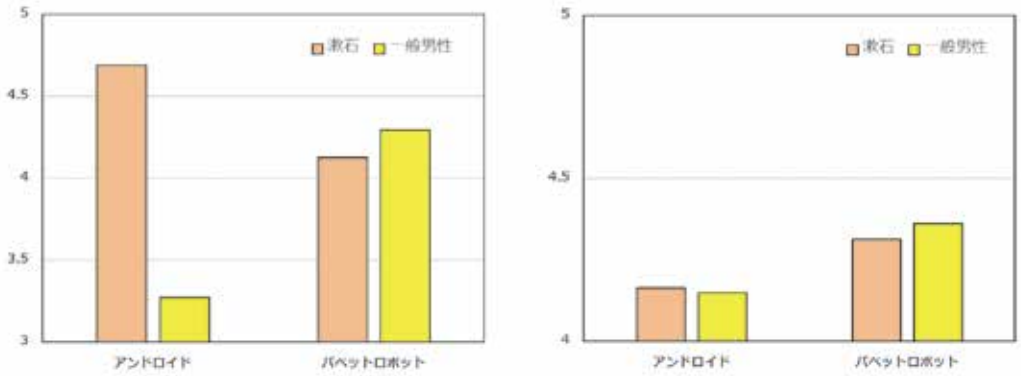


図3. 言葉の印象
（左：ロボットの見た目と言葉の一致度、右：言葉の意味を深く考えられた度合）

	尊敬できる	愛いらしい	怖い	神経質	知的	感情的
聞いた言葉に対して共感・感動した	0.524	0.363	-0.137	0.030	0.405	0.217
聞いた言葉の意味を深く考えることができた	0.532	0.359	-0.169	0.023	0.404	0.191
聞いた言葉が自分の考え方に影響を与えた	0.568	0.357	-0.117	0.058	0.385	0.288
聞いた言葉をこれから大切にしていこうと思った	0.568	0.344	-0.124	0.062	0.402	0.253
聞いた言葉は響いた	0.571	0.372	-0.122	0.033	0.406	0.271
聞いた言葉は自分の現在の悩みの解決に役立った	0.551	0.342	-0.063	0.072	0.340	0.341
ロボットが述べた言葉はどれだけロボットの見た目の雰囲気と合っていましたか？	0.526	0.395	-0.275	-0.051	0.470	0.258

図4. 言葉の印象とロボットの印象のスコア間の相関係数

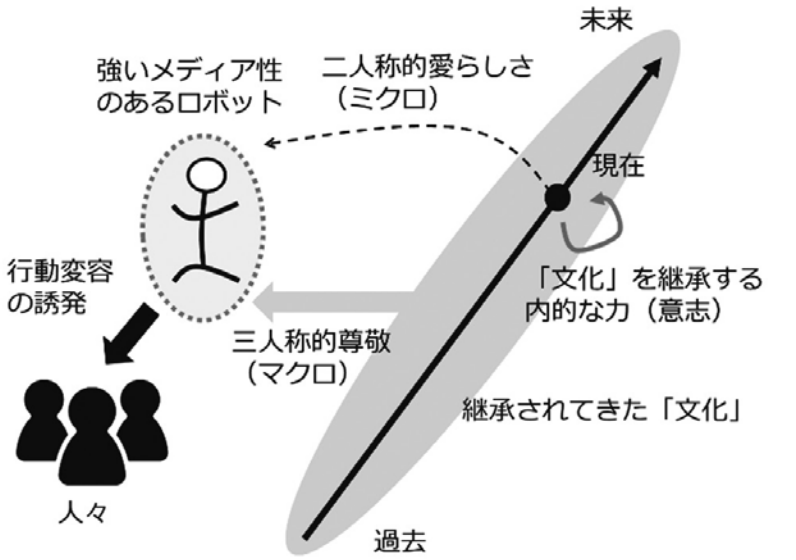


図5.「尊敬」と「愛らしさ」を備えたメディア性のあるロボットのイメージ

もう一人の夏目漱石
――パペットロボットの導入

二松学舎大学大学院文学研究科
教授　山口 直孝

心理実験の副産物

パペットロボットの導入の話は、心理実験の過程で生まれた。漱石アンドロイドの発話が人に与える影響を測るためには比較対象が必要となる。これまでの実験では、人や対話型ロボットが選ばれていた。本ロボットは、2021年度の実験再開の際に、新たな組み合わせ候補として浮上したものである。

パペットロボットは、CommUやSotaなどを開発したヴィストン社製の小型ロボットであり、首と腕が可動部分で、体を左右に動かすことができる。布で作った人形で装着することで、特定のキャラクターになることができ、パペットロボットという通称もそこに由来する。

心理実験では、当初用意されたのは、動物パペットであった。話し合いの中で、夏目漱石を模した方が、条件をより統一できるのではないかということになり、大阪大学の方で新たに漱石パペットを作成してもらい、実際の実験もこちらで行った。漱石アンドロイドと漱石パペットとの対照は、被験者が二体の漱石に遭遇するという、今までにない体験をもたらすこととなった（声は、漱石アンドロイドのものを漱石パペットにも用いている）。「漱石」を同一条件とする心理実験は魅力的な題材であり、継続していくことが望ましい。AR分科会で検討した結果、二松学舎大学でも一体を確保し、独自の運用を行うことを決定した。共同実験の継続がもたらした副産物と言えるであろう。

小型ロボットが拡張する漱石像

パペットロボットの導入を決めたのが年度末であったため、本格的な運用は2022年度からとなる。現時点では試用に止まっているが、漱石アンドロイドに比べて、操作が簡単であり、維持にかかる負担や手間が少ない長所を実感することができた。漱石アンドロイドと同じく、「漱石アンドロイド研究室」に常置する。

同ロボットが加わったことの利点として、心理実験の実施が容易になったことがまず挙げられる。また、漱石アンドロイドの不在期間（イベント出演やメンテナンスなど）に代理を務めることができる、というのも魅力であろう。さらに、アンドロイドサークルの活動の幅が拡がるのも見逃せない。パペットロボットは、人形さえ作れば、他のキャラクターも演じられる。二松学舎の公式キャラクターであるねこ松のパペット版を作成しても面白い。

漱石パペットは、動く小型人形であり、かわいらしいという反響が予想される。漱石アンドロイドと違う魅力を持ち、人気者になる可能性もある。広報活動で力を発揮することが期待されるが、本質的な部分で重要なのは、デフォルメされているとはいえ、夏目漱石という属性を引き受けていることであろう。

二人の漱石が指し示すもの

2019年度にイラストで漱石アンドロイドのLINEスタンプを作成したが、漱石パペットはその姿に近い。二頭身であり、年齢をあまり感じさせない。外見の忠実な再現を目指した漱石アンドロイドに対して、漱石パペットは、およそ志向性が反対である。にもかかわらず、特に断らなくても、漱石パペットは、漱石を模していることを、多くの受け手が了解する。男性、洋装、髭といった要素が記号として作用していることから、漱石に関する情報が世間に深く浸透していることが知られよう。漱石アンドロイドと漱石パペットとが共に漱石と認識される背景を確認し、可視化することが一つの研究課題となる。

漱石パペットは、もう一人の漱石として今後活動する。イベントへの参加や動画での登場が今後増えていくであろう。当然、漱石アンドロイドとの共演もありえる。二人の漱石が同時に現われることは、参加者のどのような反応を生み出すであろうか。複数の漱石の同時に提示することは、新たな漱石像を生み出すきっかけとなるかもしれない。偉人という、歴史的存在のアイデンティティと拡張のありようを考察する上で、共同研究プロジェクトは、有力な素材を持つことができた。

漱石パペットロボット

渋沢大河ドラマと漱石アンドロイド

二松学舎大学大学院文学研究科
教授　島田 泰子

コロナ禍も２年目を終えた。各種の活動が引き続き制限される中にあっても、あらゆる局面においてなお漱石アンドロイドについて考える機会はあった――例えば、2021年２月から年末に掛けて放映された大河ドラマ「青天を衝け」を、あるいは11月に六本木で開催された展示「『未来の死』をあなたに問う展覧会　END展 死×テクノロジー×未来=?」[*1]を、さらにそれと連動したトークショー《END BAR》のアーカイブ映像を、それぞれ観るとき（いずれも後述）。

当初のプロジェクト期間（５年）も既に過ぎたが、コロナ禍中断ロスタイム分のアディショナルタイムか、延長されたプロジェクト期間がまだ続くらしい。実質的な研究活動もほとんどなく報告書の内容も枯渇気味であるなら、年度末にあたりこの１年を振り返って今年度の報告書をしたため、“枯れ木の山に賑わい”としたい。

１．「コロナ禍」と「文豪」

長引くCOVID-19の感染拡大とそれに伴う社会活動・経済活動等への影響を「コロナ禍」と最初に表現したのが誰であったか、稿者は知らない。この語を見聞きしてただちに「戦禍」「舌禍」「筆禍」「輪禍」など後項に「禍」を持つ二字熟語のラインナップを思い浮かべる層にとっては、この「コロナ禍」という語がそれらのもじりであることも容易に理解出来る。漢籍に親しまず「殃禍」という漢語は知らなくても、日本語の語彙として使われる熟語がいくつか思い浮かぶなら、耳にした当初は戸惑っても、文字を目にすれば「禍」が意味するのが「不幸を引き起こす災い」「災いによってもたらされる迷惑な騒ぎ」であることはほどなく了解されよう。

ところが、上記のような類例となる熟語に触れた経験がなく、日常での使用頻度が低い「禍」の字義についておよそ見当もつかない人々にとって、「ころなか」という謎めいた音の並びは、その響きが担うもの（意味やニュアンス）にピンと来ることもなく、「なんのことかよく分からない」（31歳・作業療法士）、「伝わらない。ネーミングセンスが悪い」（54歳・カーディーラー）などと感じるらしい。いずれも稿者の知人から直接聞いた所感を引用したものであるが、前者の若者は、SNS上での発信など文字を伴う場面では常に「コロナ渦」という表記でこの語を使用している。聞けば、“自分なりの”理解をふまえ「コロナ旋風」のつもりで使っている由。社会を騒然とさせる感染拡大さわぎが巻き起こり、その激しいうずに飲み込まれて人々がもがく様子を、“自分なりに”表しているのだという。「コロナ鍋」はさすがに措くとして、市中に蔓延する「コロナ渦」にはそんな“（使用の）当事者の論理”があったという衝撃の事実は、「（語構成論を含む）日本語学の専家」として実に興味深いものであった。「コロナ禍」という見慣れず耳慣れない新語が、新型コロナウィルス感染症の蔓延によってもたらされる災いを端的に表現した語であること。そこには「戦禍」さながらに日常が破壊され、この上なく迷惑をこうむる、しかし抗うすべのない不条理も含意されていること。それらが、実感をもって諒解されるには、周辺的な知識も含めた土壌が不可欠ということであろう。

翻って、「文豪」という語についても同じことが言えるのではないか。「剣豪」「酒豪」「富豪」などといったラインナップが「我が輩の辞書」に無く、類例として思い浮かべることもない層にとって、「ブンゴー」という（「偉人」に比べて）馴染みのない響きは、その意味（文筆活動において特段の実力を示す者）や、含意されるニュアンス（「剣」「酒」「文」など「ある評価軸」においての評価が高いということであって、それ以外の総合的な人間としての評価や価値はまた別であること）などは、了解されにくいのかもしれない。漱石はたしかに偉大な文豪ではあるが全人格的に手放しで

称揚される「偉人」扱いはいかがなものかという疑念、「文豪は（ただちに「イコール」として）偉人ではない」という指摘や批判が通じない背景には、商業的な意図（による「偉人」路線の堅持）という側面の他にも、前提となる知識や情報・文化的背景の多様性などといった事情が潜んでいるように思われる。

世間では「偉人」のほうが通りも良い。「よく分かんないけど、なんか偉い人（みんながそう扱う）」「格言を残し、意識高い系がありがたがるような人（戦国武将含む）」「上から説教・説法をしてくる、偉い存在（人ではない「観音」など神仏までをも含む）」というあどけない認識や、日本を代表する「著名な文人」として選定された一葉や漱石も含め「お札に載れば、みな偉人」という究極に単純化された認定基準の存在なども、推測される。世間はともかく「共同研究」と銘打っての本プロジェクト内では、見解の止揚を企図して、狭義における偉人／広義における偉人と階層を分けて両者の主張をとりもつ提案を行ったことがあるが（2020年度の本『報告書』pp.27-28を参照）、世間一般で思考停止気味に受け入れられているほどに「偉人」がア・プリオリなものではないことは、改めて念を押しておきたい。

2．もじり・パロディの成り立つところ

「コロナ禍」が「戦禍」「舌禍」等のもじりとして認識されるには「元ネタ」を知らなければならない、という先の話題は、「パロディの成立要件」に関わる。パロディがパロディとして機能するための必須条件としての「元ネタ」理解は、2019年度に開催したシンポジウム「アンドロイドに魂は宿るか？　漱石アンドロイドをめぐる３つの視点[*2]」でも、さまざまな場面で関わっていた。

マエセツ・マエフリとして稿者が行った論点整理と問題提起のプレゼンテーション中、生前の漱石が笑顔の写真を撮らせ／撮られたがらなかったエピソードを取り上げる際に「笑わない男」というフレーズを使った。分かる人には言わずもがなのことではあるが、あれは、シンポジウム開催当時の「世間の流行」を踏まえたパロディである。ラグビーW杯の日本大会で８強入りした稲垣啓太選手（パナソニック）の強面な様子を表すのにマスコミが多用した「笑わない男」というフレーズは、年末にはその年の流行語大賞にもノミネートされた。試合中以外の日常的な場面では笑うことも当然ある。それをも含意した「笑わない男」という表現は、しかし元ネタを知らないと理解はされない（シンポジウム当日、壇上で夏目房之介先生に「笑わないわけじゃないんですよ、人間なんですから。（生前の）漱石だって、笑うときもあるわけで」とわざわざご説明いただくシーンも生じてしまった）。さらにあの「笑わない男」には、『攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX』に登場するハッカーのニックネーム「笑い男」も響かせていた。シンポジウム登壇者のひとりである佐藤大氏が手がけたアニメ作品の登場人物ということで、〈笑う－笑わない〉の対比が隠れていたのだが、さすがに芸が細かすぎてほとんど伝わらなかったようだ。

オープニングアクトとして上演された漱石アンドロイドによるモノローグ[*3]も、台本のセリフやト書きにはその手のギミックが満載であった。一例を示せば、「今日は木曜？　だからみんな集まっているのか」は、漱石邸へ弟子筋が集っては議論を交わした「木曜会」を踏まえてのもの。幼少期の写真を示されて「そんな子は知らない」のくだりは、「蜂に腕を刺されたら…」「砂漠を歩く亀を…」等のセリフとともに、映画『ブレードランナー』のパロディ。写真の記憶でホンモノ（生身の人間／本人）か作りもののアンドロイドかを確認する仕掛けは、脚本を手がけた佐藤大氏によるシンポジウム当日の解説で種明かしがなされ、漱石アンドロイドがデッカードに尋問を受けているという洒落た設定については、当日ゲネプロを見守った複数の関係者から実際にビビッドな反応が得られた――登壇者の大山顕氏、本学の西畑理事等）。

元ネタを知るクラスタと知らないクラスタとで反応が分かれるこういったパロディの愉しみは、一歩間違えると内輪ネタ・楽屋オチ的な側面を持ち、〈分かる／分からない〉での分断を鮮明にしつつ、〈分かる〉側の連帯感の確認や強化と裏腹に、〈分からない〉側への排他的な機能を発揮する。あの「手の込んだ」「仕掛けの多い」モノローグ作品を、一見難解に見えて理解出来ない苛立ちからか「漱石作品からコピペしてきて繋げるだけなら、うちの学生でも

書けるよね」とこき下ろす向きが実在するのも、その排他性への鋭敏な反発に他ならない。先に取り上げた「コロナ禍」の語について「〈分からない〉側を置いてけぼりにして、〈分かる〉側だけがドヤ顔で多用している」印象を抱き、「ネーミングセンスを疑う」「自己満足、イミフ（意味不明）な言葉」「なのにイケてる表現だと思っているところがイタい」と反感をむき出しする人たちの情緒的反応も、社会言語学的な集団語の機能に照らせば同じ構造として理解できる。

そういったパロディの“イケズな”側面はさておき、問題は、「元ネタ」を意外とみな知らないことであろう。著名な文豪とて、多くの一般人にしてみれば、せいぜい「教科書で部分的に触れた」程度。親族や研究者など一部の例外を除けば一次資料も知らぬまま二次創作のドラマや漱石ロボなどを通じて形成されるパブリックイメージ、そこに加担するアンドロイドの責任というものを、常にやや重く捉えてしまうのは、そんな事情も含んでのことであった。

3．渋沢ドラマと漱石ロボ

世間は「オリンピックイヤー」で盛り上がった2021年であったが、関心の薄かった稿者にとって、この１年は「大河イヤー」であった。紙幣の刷新と連動して再評価の機運も高まる渋沢栄一の生涯を描いた大河ドラマ「青天を衝け」を、稿者は珍しく全回欠かさず録画して観た。もともと尊徳翁と並んでその倫理的な理念と精神に敬愛の念と関心を持ち、勤務先の第三代舎長を務めたという縁もあって、寓居が飛鳥山の近傍にあった頃から渋沢旧邸へは何度も訪れ親しみを抱いていたからである。「上州ことば指導」に研究者仲間がクレジットされていたこともあって、方言や近代語の扱いを含めた日本語学的な関心もあった。

史実を踏まえた二次創作であるドラマ作品において、日本の近代化の道を拓く数々の偉業を成し遂げた経済人を、変節漢・艶聞など負の面含め生身の人間としてどう描くかは、前節に述べた「偉人」の議論にそのままつながる。「明治維新」のような史実の解釈すら、時代を動かした人々の思惑や歴史的な意義に至るまで解釈には幅があり、通説検討の余地が常に残されていることも、「評価」という共通キーワードにおいて、本プロジェクトに不可欠な問題意識と通底するものであろう。なお後者については、歴史評論家の香原斗志氏による記事「『明治維新は薩長によるテロだった』初めて大河ドラマでそう描いたNHKをもっと褒めよう　ー維新賛美の「司馬史観」から脱却した」[*4]が興味深かったので言及しておきたい。台本の周到な細部により明治維新を「薩長によるテロ」として明快に描いた今回の渋沢大河が、従来の通説からの脱却を果たし（世間が共有する）歴史観を更新する点で画期的であるとの指摘は至言であり、「クーデター」でもなく、無用ないくさを起こしその犠牲となる大量の戦死者を出した点に光を当てあえて「テロ」行為呼ばわりする思い切った辛辣さも含めて、一読に値する。

伊藤博文、岩倉具視といったかつての紙幣の肖像モデルが、明治“新”政府側の視点によって立つ「偉人」認定であること。一方の立場で同じく勲功者であった渋沢翁が、令和の世になって再評価され、新紙幣の“顔”となって一躍脚光を浴びること。評価者の立場や評価軸のあり方の相対性。肖像の採用と価値評価との循環的相互作用。「（動く）銅像」を造ることと「偉人」扱いされることの、同じく相互作用。そして“銅像”制作・設置者の意図もしくは欲望[*5]。渋沢ロボや、それに先駆けてアンドロイド化された漱石ならびに漱石ロボを巡る視点にとっても、欠かすべからざる認識であると言える。

4．似せロボで「偉人」はよみがえるか

今回の渋沢大河で目を引いた点として、もう１つ、「死をきちんと描く」ドラマであったことがあげられる。栄一の父、母、養子、妻、いとこをはじめとして近しい関係者の死は、往生際のシーンを含め特に丁寧に描かれた。何年何月に享年何歳で没したとのナレーションによって物語からの「退場」を明言する手法は、ひとつの時代の終わりを暗示し、ドラマのフェーズが切り替わることを示すのに効果的で、なおも生き続け精力的な活動を停めることのなかった主人公の長寿と健勝を際立たせ、観る者に印象づけた。それでも生身である以上最後は必ず迎える栄一翁の「死」につ

いて、ドラマでは最終回で、孫の敬三を語り手に据え、一人称の視点から回想回顧を伴って語らせる方法で描いていた。

放蕩により廃嫡とされた父の代わりに事業と家督を継いだ敬三が、栄一の葬儀の際に会葬者に向けて語った想い出や祖父から預かったメッセージは、このドラマが描いた“偉大なる”「近代日本経済の父」渋沢栄一その人の神髄をよく伝えていたように思われる。“虚業”に携わる文人に比べ評価の軸が安定しやすい“実業”家の経済人は、確かに文豪と違って「偉人」扱いにも違和感がない。にも関わらず脚本家は、最終回で敬三に「偉人呼ばわりは祖父に似合わない」と言わせた（そこにお札だのアンドロイドだのを含む「偉人」扱いへの牽制はなかっただろうか）。若き日の決意を忘れず生涯にわたって精力的に続けたすべての活動を通じて浮かび上がるのは、実業家として生きたひとりの人間の一貫した志であり、理念であり、意欲や倫理観をも含めた哲学を持つ、精神そのものである。言うまでもなくドラマのタイトルもそれを象徴するものであり、最終回のラストシーンでは、故郷血洗島の大樹のもとに青年の姿のままの栄一が登場しそれを改めて顕示する格好となった。

アンドロイドを作ることで「よみがえる」のは、肉体が老いてもなお青年然として衰えることのなかったその精神であろう。渋沢アンドロイドによって「よみがえらせる」ことが出来るのは、本人そのものではなくむしろその魂である。いみじくも漫画家の龍波ユカリ氏は、本稿冒頭に触れたトークイベントの中で、死後に故人を最新技術で再現したり「よみがえらせる」にあたっては「肉体から作らないほうがいい」と明言している[*6]。ガワだけ作って見た目を似せて満足し“仏作って魂入れず”となることへの違和感や懸念を端的に述べたものであったが、漱石に関しても類似のことは言えるかもしれない。「等身大模型」的な複製による身体性の再現には、マテリアルな実体ならではの価値と効果ももちろんあるが、ロボットの製作による身体性の再現と人格や言動など内面の再現、その両者のバランスがやはり重要であることは、常に記憶にとどめたい。

*1 「『未来の死』をあなたに問う展覧会　END展 死×テクノロジー×未来=?」は、最新技術と人の暮らしや社会について検討し新たな制度設計を目指す「HITE（Human Information Technology Ecosystem）研究」の一環である「HITE-Media」プロジェクトが実施した展示である（2021年11月3日～14日に東京・六本木の ANB Tokyoにて開催）。「AI時代、死の定義が変わる!?」をテーマに「これからの『死』をあなたに問う展覧会」として行われた展示や関連トークイベントの詳細は、公式サイトを参照されたい（ https://hite-media.jp/symposium/681/ ）。

*2 2019年11月9日開催。企画の趣旨、議題、プログラム、登壇者等の詳細は、本共同プロジェクト公式サイトのイベントページを参照（ https://www.nishogakusha-u.ac.jp/android/event/20191109.html ）。

*3 「Variable Reality（ヴァリアブル・リアリティー）　―虚構は可変現実」。youtubeに公開された動画が視聴可能である（ https://www.youtube.com/watch?v=Srg-g0ZGngY ）。

*4 Webサイト「PRESIDENT Online」2021年10月9日掲載（ https://president.jp/articles/-/50648 ）。

*5 稿者が企画した2019年度のシンポジウム（注2参照）において、登壇者の大山顕氏が小田原のどか氏の彫刻論を引きながら、プロパガンダとしての「偉人の銅像」をめぐる諸問題について注意喚起を行ったことも、この意味において重要である。シンポジウムの書籍化は現時点で実現していないが、当日客席から行われたイベント中継ツイートの中で、来場者が大山氏の発言よりも早く小田原のどか氏の名前を挙げて彫刻論とのつながりを指摘している様子などが、Togetterまとめ（ https://togetter.com/li/1482256 ）に参照可能な記録として残されている。

*6 トークイベント《END BAR》、11/6（土）実施分のうち２番目のプログラム「老いと終活」（ファシリテーター：うめ・小沢高広、高橋ミレイ）。当日のトークの模様は、youtubeに公開されたアーカイブ映像で事後視聴が可能である（当該発言のシーンは、リンク先13:10～あたり。 https://youtu.be/ovoCUUNUwsM?t=788 ）。

アンドロイドとファンアートが描く世界

二松学舎大学大学院文学研究科
教授　塩沢 一平

1　アンドロイドとファンアート

アンドロイドには、本研究の対象となっている漱石アンドロイド、渋沢栄一アンドロイドのような、偉人アンドロイドがある。その亜種として、NHKとヤマハが共同で開発したAI美空ひばり３Dが考えられる。また生きた人間のアンドロイドとしては、「マツコロイド」、黒柳徹子のアンドロイドの「ｔｏｔｔｏ」がある。また、研究者石黒浩氏本人が作り出す「ジェノミノイドHI」がある。この亜種としては、プレイステーションのゲーム『DEATH STRANDING』（以下デススト）に三浦大知を３Ｄスキャンしてアバター化して作られたカメオ、「ミュージシャン」が想定される。

このデスストとそれに夢中になる三浦大知ファンについては、以前に述べたことがある。三浦大知は、全てのファンに平等に接し、特定のファンに対してファンサービスを行わない[(1)]。そのため「現実の三浦大知本人では叶わない個人的な繋がりやファンサービスを受けることが、ゲームの中では叶う」[(2)]からであると述べた。

その三浦大知ファンには、ファンが憧れる「絵師さん」と呼ばれる人達がいる。三浦大知と本人と見紛うばかりの写実的な絵を描いたり、キャラクター化した可愛い三浦大知を描いたりして、画力を誇る人達である。また、三浦大知を格好良く描いた切り絵や消しゴムハンコ、缶バッジなどのファンアートを制作する、高い技術力で有名なファンもいる。これらの人々との交流や先に示したデスストの考察の中から、これらの人達も、現実の三浦大知本人では叶わない繋がりを求めてもうひとりの三浦大知を描いているのではないかとの仮説を立てた。この仮説をもとに、技術力の高いファンアート描く人達の中から、直接対面したことがあったり、親和関係が成り立っていると考えられたりする方々にメッセージインタビューを行い、エスノグラフィックな調査を行った。

2　インタビュー調査と結果

インタビューの内容は以下のようなものとなる。

○○さん、こんばんは。塩沢一平です。ツアーも始まりますね。いつもTwitter（Instagram）の○○アートを楽しみに拝見しています。さて、今三浦大知も含めた小論を作成中です。その中でファンアートに関しても触れており、格好いいアートをお作りの○○さんににぜひともお聞きできればと思いメッセージをしました。素晴らしいアートをお作りの皆さんは、大知の素晴らしいアートをお作りになる喜びがあると思います。それと共にそのアートの先に三浦大知がいて、アートを作ることでその大知と繋がっているような感覚を持つことはないのでしょうか。少し誘導した質問のような形になりますが、お教えいただけないでしょうか。何卒よろしくお願い申し上げます。

このインタビューに対して、質の高い缶バッジを作成し（写真１）、消しゴムハンコのワークショップを開催もする**ひろ**氏は、次のように答えている。

写真1

そうですね、自分の中の三浦大知さんを作品にしているという感覚でしょうか。作品を作る前に、自分の中にいる三浦大知さんがこんな感じに作品として作れるかな?等のイメージが先にあって、そのイメージを作品として実物化している感じですね。ですので、繋がっているという意味では直接繋がっているいう感覚より、勝手ではありますが、自分の中の三浦大知さんと繋がっているという感覚の方が近いですかね。

大知との繋がりは感じるものの直接ではなく、自己の中に描く理想的な大知像との繋がりを感じているようである。このあたりをさらに詳しく述べているのが**カナ**氏である。**カナ**氏は、精巧で格好いい切り絵（写真２）や消しゴムハンコで有名で、大知の栃木ツアーでは、スタンド花を贈る「お花企画」の企画者を務めた人物でもある。**カナ**氏は、

アートを作ることで大知くんと繋がっているような感覚いつも感じています。ただの紙や消しゴムや葉っぱなどが私の手によって、どんどん大知くんになっていくという喜び。これを感じたくて、作っている気がします。

彼の輪郭や体のラインなどをカッターの刃でなぞるという作業ではただの紙や消しゴム相手にいつもドキドキしてしまいます(笑)そして、私は独占欲が強い方なので作品に対して「コレは私が作ったんだから、私の大知くん」っていつも思っていて(笑)Twitterやインスタに載せる時は「私の大知くんカッコいいでしょー!?」っていう彼氏自慢的な感覚です。

写真2

と述べている。**ひろ**氏と同様に、芸術性の高いセンスによって、自らの中に描く理想的な大知を、制作し、その大知像との繋がることによって満足感を得ているものと考えられる。

また、三浦大知やそのダンサーたちを可愛らしくキャラクター化する（写真３）、有名な絵師さんに**KY**氏がいる。**KY**氏は、

写真3

人生で初めて大知くんを生で見たのが、コンサートではなく奇跡的に当選した番組観覧でした。その貴重で幸せな体験をどうにかして再現したい…と思いたち、Twitterに投稿しようと試みるも、思い出せる記憶と文字がうまく一致せず、一番納得できた方法がイラストでした。

結果的にイラスト交じりのレポはファンの皆さんもたくさん見て下さり、お礼の言葉をいただいたり、大知くんの魅力がさらに広がったのを身に染みて感じました。それを機に、少しでもイラストを通してファンの方が幸せな気持ちになったり、私も描いていて幸せな気持ちで応援出来たらと思い、今に至るという次第です。Twitterに一枚絵を載せて、ファンの皆様に温かいコメントをいただく。それだけでも大知くんの優しさや人柄の良さを彷彿とさせて、まるでそのまま本人と繋がっている、そんな気持ちがします。

と語っている。アーティストの人柄がファンにも伝播し、そのファンとの繋がりが大切になっている旨の答えであったように思われる。実際KY氏のイラストは、他の人にも提供され、他の人のアイコン（プロフィール画像）やヘッダー（プロフィールの背景）にも多く使用されている。このことからも、質の高い大知のイラストを描くことで多くのファンと繋がっていることがよく理解できる。

一方、写真と見紛うばかりの大知の緻密な絵を作成する（写真４）**ぽこ**氏は、少し違った答えを寄せてくれた。

ご質問についてですが、私は繋がっているという感覚はあまりないかも知れません。リアルな絵の方はなるべく「三浦大知」だと考えずに描くようにしています。先入観で見えているものをそのまま描けなくなるからです。それこそ「人」というのも考えないようにしています。なぜ描くかと言われると、どういうところが好きなのか表現したいという気持ちなのかなと思います。

写真4

というように答えている。先入観を排して精密な美しさを表現しているようである。

3　考察

過去のファン文化調査の結果から、高い画力によって本人にうり二つの三浦大知を描いたり、可愛らしくイラスト化された三浦大知を作り出したりするファンアートの達人たちは、三浦大知が、ファンと平等の関係を保つために、特定のファンサービスをしない代償として、ファンアートを描くことで、三浦大知との繋がりを求めているのではないかと仮説を立てた。

しかし結論は、ファンが作り出した自らの三浦大知との繋がりをもとめてファンアートを制作したり、ファンアートの質の高さを求めて、あえて三浦大知を描いていることを捨象して、絵の制作に専念したりするというようなものであった。エスノグラフィックな調査からは、定量的な調査からは汲み上げられない、ファンとファンアートへの細かな思いが浮き彫りになってきたものと考えられる。ファンアートの作家には、カレンダーを作成するファンや、高い画力を誇る「絵師さん」と呼ばれる人達がまだまだたくさんいる。これらのファンへの調査も継続し、アーティスト（本人）とアンドロイドではないが、描き出されるアーティストとの関係の考察を進めたい。

注

(1) 塩沢一平「三浦大知のファン文化研究―お花企画を中心として―」（『人文論叢』第103号　2019年10月）

(2) 塩沢一平「アンドロイドとAI美空ひばり、そしてゲームキャラクターとしての三浦大知」（『「漱石アンドロイド」プロジェクト2019年度共同研究報告書』2020年3月）

なぜわたしたちは漱石アンドロイドを「漱石先生」と呼ぶのか

二松学舎大学文学部
専任講師　谷島 貫太

「漱石先生」という呼称

夏目漱石のことを、わたしたちはたいてい呼び捨てにしている。夏目漱石とか、あるいはたんに漱石とか。しかし漱石アンドロイドは決して呼び捨てにはされない。どのように呼ばれるか？「漱石先生」である。

パブリックな場に登場するとき、漱石アンドロイドはたいてい「漱石先生」と呼ばれてきた。そのように呼ぼうといった取り決めがあったわけではない。おそらくごくごく自然と「漱石先生」という呼称が使われ、それが誰の耳にも瞬時に馴染んでしまったというだけのことだと考えられる。この呼び名はあまりに自然に感じられたので、誰もがその事実の脇を通り過ぎてきた。しかしあらためて考えてみると、人工物に対して皆が「漱石先生」と呼び、そして誰もそこに違和感を覚えないという事態が成立している事実は、じつはさまざまな問いをはらんでいる。

ヒューマンエージェントインタラクション研究と漱石アンドロイド

みなが特定の人工物を「先生」と呼ぶという事態を検討するに際して参照できる学問的枠組みのひとつに、ヒューマンエージェントインタラクション（HAI）研究がある。これは、人間とエージェントとの相互作用を研究する分野である。大澤はHAI分野でのエージェントを、ダニエル・デネットによる定義をベースとして「ユーザの志向姿勢により認知される社会的他者」と定義している[i]。「志向姿勢」とは、ある他者を動機や意図などの「志向性intentionality」を有するものとして接する態度のことを指す。たとえば将棋のAIと対局するとき、多くの場合対局者はそのAIの指し手の背後にある意図を読み取ろうとする。実際には将棋AIには人間がもつような意図は有さないはずだが、重要なのは、対局者が将棋AIを意図をもつ者〈として〉接するという点だ。漱石アンドロイドもまた、事実としてなんらかの意図や動機を有しているわけではない。しかし、わたしたちが漱石アンドロイドの振る舞いのうちになんらかの形で意図を読み込もうとした瞬間に、そこにはデネットがいうところの「志向姿勢」が生じている。

HAI研究において扱われるエージェントの種類は多岐にわたる。シンプルなチャットボットからビデオゲーム内で自律的に振る舞うキャラクター、SiriやAlexaなどのヴァーチャルアシスタント、くら寿司で出迎えてくれるペッパー君など挙げていけばキリがない。わたしたちは人工物に容易に志向性を見出してしまうし、またそうした「誤認」を生み出すためのさまざまな工夫が日夜研究されている。たとえば自動運転システム。アメリカ研究チームが行った実験によると、同一の自動運転システムであるにもかかわらず、「アイリス」という女性名がつけられ、癒すような声を発する自動システムを被験者は高く信頼したという。また事故が生じた際には、「アイリス」に乗車した被験者は、事故の原因を車自身に求めなかった傾向があったという[ii]。

漱石アンドロイドもまた、HAI研究で扱われるエージェントの一つとして位置付けられうる。では漱石アンドロイドはどのようなエージェントであると考えられるのか。この問いに分け入るための入り口の一つが、「漱石先生」である。

「漱石先生」と志向姿勢

さきに「パブリックな場に登場するとき、漱石アンドロイドはたいてい「漱石先生」と呼ばれてきた」と書いた。しかしそうではない場面もおそらくある。以前、基礎ゼミの学生に、漱石アンドロイドの朗読から受ける印象を調査する実験に参加してもらったことがあった。その実験では、朗読時には漱石アンドロイドは姿は見せることはせずに、実験終了後に「触れ合い」の時間として学生が漱石アンドロイドと対面する時間がとられた。そこではおそらく漱石アンドロイドは学

生たちにたんに「漱石アンドロイド」として紹介され、学生もまたそのように接していたように記憶している。つまりその場にあっては漱石アンドロイドは一個のオブジェクトに過ぎなかった。夏目漱石の姿を精巧にかたどり、動きもするし声も発しはするが、しかし「漱石先生」として敬う空気は成立してなかったように思う。

ただ、デネットがいう「志向姿勢」という点でいうと、それが完全に不在であったかといえばおそらくそうではなかった。人は自動お掃除ロボットのルンバの動きにも「エージェントらしさ」を感じるという[iii]。漱石アンドロイドの精巧な表情を正面から見て、「目が合った」と思わないことは不可能に近い。そこにはすでに、「漱石アンドロイドがこちらを見ている（実際には漱石アンドロイドには見るという志向性は存在しないし、そこにあるのは目ではなく目のようなモノである）」、という志向姿勢が成立している。つまり、漱石アンドロイドがときにまとう「漱石先生」という存在感の成立は、単純な志向姿勢の成立とはまた別の問題である可能性が高いのだ。

相互主観的経験としての「漱石先生」

デネットに大きく先立って志向性をめぐる議論を展開させた哲学者の一人に、エトムント・フッサールがいる。デネットの志向姿勢の概念は「漱石先生」の成立を説明することは難しいと思われるが、フッサールはこの文脈に適した概念を用意してくれている。それが相互主観性である。これは、複数の主観の間で共有されるものとして成立している主観性をさす概念だ。

漱石アンドロイドの例で考えてみよう。漱石アンドロイドは、客観的な意味でも「先生」であると言えなくはない。というのも二松学舎大学は、漱石アンドロイドに特別教授という肩書を正式に与えているからだ。しかしわたしたちが漱石アンドロイドを「漱石先生」と呼ぶとき、そこで含意されているのはそういった客観的な事実ではないだろう。「先生」という言葉がそこはかとなく喚起する、ふんわりとした敬いの態度がおそらくそこには込められている。これは主観的な経験である。客観的な肩書としての特別教授とは異なり、漱石アンドロイドはそれを「漱石先生」とみなさない者にとっては「漱石先生」ではないのだ。

さらに、「漱石先生」においてはこの主観的な経験の成立は、たぶんに共同的なものである。漱石アンドロイドと一人で向き合うとき、おそらくそこには「漱石先生」は立ち現れない。「漱石先生」が立ち現れるのは、たとえばシンポジウムの場などで、漱石アンドロイドを「漱石先生」と呼び、またそのように扱うというある種の合意が生み出されている場合である。その場にいるそれぞれが漱石アンドロイドを「漱石先生」として扱い、またそれぞれがそのように扱うということをお互いに信じられている限りにおいて、「漱石先生」は相互主観的なものとして成立する。かなり不安定ではある。貨幣もまた同様の構図のもとに成立しているが、複雑に絡まりあった社会システムがその足場を安定させている。対して「漱石先生」は、以前のシンポジウムで登場した「テクノロジー忖度」という表現が示すように、みなが積極的に半歩ずつ踏み出したところにかろうじて保たれるいくらかアクロバティックな相互主観性である。

エージェントという観点から見たとき、漱石アンドロイドにはさまざまな側面がある。たとえばかつて心理実験で行われたような対面での問答の場面では、そこに成立している「志向姿勢」という観点からエージェントとしての漱石アンドロイドの特殊性について考察することもできるだろう。しかし「漱石先生」という呼称が成立している場面を検討してみると、従来のHAI研究ではあまり意識されてこなかった側面に光を当てることができる可能性がある。

i　大澤博隆「人工的な他者への信頼―HAI研究における信頼」（小山虎編著『信頼を考える』勁草書房、2018年、p.326-327）

ii　レイチェル・ボッツマン『TRUST　最先端の企業はいかに〈信頼〉を攻略したか』日経BP社、2018年、p.275,276

iii　大澤前掲書、p.330

漱石アンドロイド演劇動画の授業活用について

二松学舎大学大学院文学研究科
教授　瀧田 浩

本学文学部国文学科1年の必修科目「日本文学講読入門①（夏目漱石）」第10回（2021年11月24日実施）において、2018年8月に二松学舎大学で開催したシンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？」のオープニングアクト演劇「手紙」の動画を取り入れた授業実践をおこなった。次回・次々回の授業においてもフィードバックの時間をもうけた。この報告をおこなう。

ロンドンに留学している夏目漱石のもとに、東京下谷で病を得て臨終が近づいているはずの正岡子規が訪ねていき、過去に出したおたがいの手紙について対話を重ねるという内容の「手紙」は、漱石の生涯を概観しながらその代表的な文学作品について理解を深める科目の目的と対応し、視聴により効果的な学修が可能であると考え、30分ほどの動画を授業に活用することとした。昨年度も同じ授業内容の報告をおこなったので（授業方法を具体的に知りたい方は昨年度の報告を参照されたい）、今年度は受講者のコメント紹介を中心に報告する。

授業は以下の流れで進めた。①プリントによる子規と漱石による書簡の解説→②演劇動画視聴→③受講者による分析課題答案作成→④次回授業における優秀答案の共有と教員による解説→⑤受講者のコメント→⑥さらに次の授業におけるコメント共有。今回の報告では、①で解説した書簡の基本データ紹介、④で共有した答案の紹介（1名分）、⑥で共有したコメントの紹介（4名分）をおこなう。なお、受講学生数は127名であるが、課題を提出した者は108名であった（提出者率は85%）。

【プリントで解説した書簡】

書簡A、1900（明治33）年2月12日＝子規（下谷）の漱石（熊本）宛／書簡B、同年3月3日＝子規（下谷）の漱石（熊本）宛／書簡C、同年6月中旬＝子規（下谷）の漱石（熊本）宛／書簡D、同年同月20日＝子規（下谷）の漱石（熊本）宛／書簡E、同年12月26日＝漱石（ロンドン）の子規（下谷）宛／書簡F、1901（明治34）年4月9日＝漱石（ロンドン）の子規（下谷）・高浜虚子宛／書簡G、同年同月20日＝漱石（ロンドン）の子規（下谷）・虚子宛／書簡H、同年同月26日＝漱石（ロンドン）の子規（下谷）・虚子宛／書簡Ｉ、同年11月6日＝子規（下谷）の漱石（ロンドン）宛／書簡J、同年12月18日＝漱石（ロンドン）の子規（下谷）宛／書簡K、1902（明治35）年10月3日＝虚子の漱石（ロンドン）宛

＊子規は9月19日に死去／書簡L、同年同月同日＝虚子・河東碧梧桐の漱石（ロンドン）宛／書簡M、同年12月1日＝漱石（ロンドン）の虚子宛

【優秀答案】Ｍ・Ｔさん（国文学科1年）のもの　＊一部省略

「手紙」は、漱石の蘇りの強調と、子規から漱石への遺言と時代の変遷という二つの主題を漱石の頭の中を通して表している演劇だと私は考えた。／まず、この演劇が漱石の蘇りを強調していると考えた訳はアンドロイドである漱石と、女性によって演じられた子規という対比にある。漱石はアンドロイドによって写真のイメージ通りの漱石が演出されており、私たちが見たのはあのアンドロイドは、漱石そのものなのだ。また、正岡子規について言及すると、本来男性であるはずのところを女性が演じている点、そして子規のセリフより「生きているのが、苦しい」はずのところを、豊かな表情で漱石に語り掛け、自由に身動きをとり、まるで苦難から解放されたかのように見える点。この二重の違和感によって子規の実体はそこに存在しない、つまり既に亡くなっていることを体現していると考えた。裏を返せば、子規の死を体現することで漱石の蘇りを強調しているのだ。／次に、子規から漱石への遺言と時代の変遷であると考えた理由について、子規と

漱石の座る位置関係に着目しながら述べる。子規は下手手前に座り、漱石は上手奥に位置している。そのため、二人が顔を合わせるときは子規が振り返るが、漱石は前を向いて話すことになる。子規が前にいる＝漱石の先にいる。子規の最後のセリフ「頼むぞな、」から読み取ることもできるが、先にこの世を去ってしまった子規から漱石への、「これからの日本の小説を担っていってほしい」というメッセージがこの二人の構図から読み取ることができる。

【優秀答案共有後のコメント】

a、手紙という演劇一つをとっても、学生の間で解釈に違いがあり、面白いなと感じました。そして、あらゆる視点から俯瞰的に分析ができている方がおり「広い視野から、課題に対して考え、培ってきた知識と表現力で課題を解決する」自分にはこの力が決定的に不足しているなと改めて痛感させられました。

b、大学受験に備え小論文を練習していたとき、コミュニケーションについて考えることがありました。今回の授業で「本当のコミュニケーションというのは、もしかしたら届かないかもしれないことに重要性を見いだしていた」と聞き、非常に印象的でした。今までは届く届かないの前に、「届いたもの」をコミュニケーションとして捉えていたため、自分の視野の狭さを実感したからです。固定概念にとらわれないことが私の文学との向き合いにおける目標でもあるので、刺激になりました。

c、今回の授業で手紙の大切さを感じることができました。届くか届かないというところに儚さを感じる。今の時代ではSNSで繋がりをいつでも感じられるけれど、昔は手紙でやり取りをすることで繋がりを感じられるのだと分かりました。／今やっている朝ドラで手紙のやり取りだけで一話をやっていた回があり、今の時代ではなかなか出来ないことだなと思いました。戦時中の手紙はとても大切だったのだと思いました。（授業で紹介された松倉如子による）「手紙」の曲を聴いた時にそのシーンを思い出してジーンとしました。／大切な時には手紙を書きたいと思います。

d、「手紙」論の続きを考えました。／「手紙」の会話が観客に向いたような格好で行われているのは、観客が「続き」側にいるからであると思う。漱石や子規の作った文学の続きにいるのが私たちである。劇において、子規から漱石への意志の継承ともいわれるものが行われる。しかし、そこには更に意味があるように思う。受け継ぎ先を、アンドロイドの漱石にしたことの意味もそこにあるのではないかと考える。この劇によって、死んだ側の人間である子規や漱石からアンドロイド漱石への継承もこの劇によって行われているのではないか。この作品は漱石や子規が書いた文章を劇にする。そして、その劇並びに手紙の解釈をある種テクスト論的に読者である観劇者に預けることに成功したのではないかと考える。

「漱石アンドロイド研究室」の設置

二松学舎大学大学院文学研究科
教授　山口 直孝

5年目に得られた活動拠点

2017年度から始まった本プロジェクトには、漱石アンドロイドを常設する場所がないという懸案事項があった。漱石アンドロイドは、普段は収蔵庫にしまわれており、実験や催しのたびに搬出され、設置されていた。人型ロボットであり、コンプレッサーなどの機器が付属するため、相当の大きさと重さとを持つ漱石アンドロイドを組み立て、移動させるのは、楽な作業ではない。出し入れの手間だけでなく、自由に使える空間がないことは、活動の幅を自ずと狭めてしまう。

漱石アンドロイドが搬入された時の研究室
（2021年5月27日）

かつてプロジェクト「おかえりなさい！　夏目漱石先生～漱石アンドロイドから未来へ」を松山で展開した際、愛媛朝日テレビが特集番組「松山もんたョ！　漱石先生」を制作した（2017年12月30日放映）。冒頭、研究室を訪れた者に促された漱石アンドロイドが松山へ出かけることを告げる。始まりにふさわしい、印象的な場面であった。研究室は番組内の設定であったが、アンドロイドに漱石先生の役割を与えるには、相応の舞台が必要であることが感じられた。

幸いに2020年度から九段1号館10階の1004研究室を使うことが可能になり、念願が叶うことになった。漱石アンドロイドは、「二松学舎大学特別教授」という肩書きを持つ。文学部教員の個人研究室が並ぶ階の一角に与えられた場所は、漱石先生の研究室と見立てるのにも恰好である（以下、「漱石アンドロイド研究室」と表記）。

研究室の間取りと課題

研究室に漱石アンドロイドを搬入したのは、2021年5月27日である。1004研究室は、細長い形の、広さ20㎡弱（7m×2.8m）の部屋である。長辺、短辺のそれぞれ一辺は窓で、九段周辺の景色を楽しむことができ、開放感がある。長辺のもう一辺にはスチール製の書架が設置されている。

運び入れた時は、備品の机や什器意外には何もなく、殺風景であった。「漱石アンドロイド研究室」としてふさわしい部屋作りをすることが当面の課題となり、作業には、伊豆原研究助手およびアンドロイドサークルのメンバーが中心的に当たった。

まず、細長い部屋の形を活かし、パーティションを入れて、操作のための空間を確保した。漱石アンドロイドを動かすためには、複数のPCやコンプレッサーなどを接続させなければならない。附属品を目につかないようにすることが望ましい。研究室は作業スペースを設けても余裕があった。ただ、二系統の電源を要するため、一つは研究室の外から取らざるをえない。また、コンプレッサーの作業音がかなり響き、漱石アンドロイドの語りを妨げかねないことがわかった。対面の心理実験会場としての利用も視野に入れているため、電源確保および消音の対策は急務である。必要な備品の手配も視野に入れながら、部屋の雰囲気を損なわないような方策を探りたい。

参照項としての漱石山房

「漱石アンドロイド研究室」は、研究プロジェクトの拠点であると同時に、漱石先生の個人研究室というよそおいも引き受ける多義的な空間である。複数の目的にかなう調度を整え、装飾を施すことが求められており、試行錯誤しながら作業を進めている。参照項の一つは、夏目漱石の書斎である。

周知のように、1907年9月末に漱石は、牛込区早稲田南町7番地（現新宿区）に転居し、亡くなるまでの10年間をそこ

で過ごした。漱石は突き当たりの8畳を書斎に使った。和室8畳と隣接した板の間に絨毯を敷き、紫檀の小机を置いて執筆に取り組んだ。壁面には書架が設けられ、和洋の大量の書籍が置かれていた。現在同所には、新宿区立漱石山房記念館が作られ、再現された書斎を見ることができる。漱石を慕う知人や若い文学者が集ったその場所は、漱石山房と呼ばれていた。

医者の普請という家屋は、「南側、東側、北側とも廊下で囲まれ、しかもその廊下の内側が厚い白壁で、窓から明りを取るやうになつてゐたから、よほど珍妙な構造である」と証言される個性を持ち、「あの伽藍堂のような、日本式とも西洋式ともつかない、いわば荒れ果てた禅寺のような感じのする板の間を見たときには、どうしてこんな所へ住む気になられたものかと、ちよつと不審に思つたものだが、先生としては、やはりその間の脱けた、こせこせしないところが気に入つたに違ひない」（森田草平『続夏目漱石』〔甲鳥書林、1943年11月10日〕）という印象を弟子に与えている。蔵書の構成も含めて、和洋折衷の性格が色濃く現われた空間は、漱石の生涯を象徴する。文学研究と工学研究とを、また、過去と未来とを接続させる本プロジェクトにおいても、多様性や混淆性が重視されなければならない。夏目漱石は外見を模倣すると同時に、時代と関わる姿勢においても意識すべき対象である。

とはいえ、漱石山房の忠実な模倣は難しい。百年以上の時間の隔たりがあり、場所の形や広さもまったく異なっている。漱石アンドロイドは、座位型のロボットであり、文机を前にして正座することはできない。仮に再現に成功したとしても、その空間は、単に眺めるだけの対象となってしまう。伝記的な事実に学びつつ、「漱石アンドロイド研究室」は、アンドロイドと人とが交流する場として、独自の設計が求められた。

漱石の書架作り

最初に始めたのは、備え付けのスチール製の書架の作り替えである。理想的なのは木製の本棚との交換であるが、費用などの点から見合わせざるをえず、伊豆原研究助手の提案で木目調の壁紙を貼っていくことになった。漱石アンドロイドサークルの有志にも協力してもらい、目の見える範囲を覆うようにした。簡単な措置であるが、部屋全体に落ち着いた雰囲気がもたらされた。

次は、並べる書目の選定である。当然のことながら、漱石の著作は欠かせない。『漱石全集』（岩波書店、全28巻＋別巻、1993年12月9日～1999年3月25日）をまず置き、「名著復刻　漱石文学館」シリーズ（ほるぷ出版）も加えた。『漱石全集』は漱石没後の刊行物であり、ある面から見ればつじつまが合わない組み合わせになるが、アンドロイドが漱石を装い、漱石を語る存在であることからすれば、当然必要な文献となる。漱石の関連書籍は、今後も随時補充していきたい。

他には、基本的な辞書、辞典類も加えた。これらは、一般的な研究室のイメージに沿うことを意識しての選択である。さらに、『アンドロイド基本原則』や『アンドロイドサークルのすべて』など、共同研究プロジェクトの成果物の棚も設けた。夏目漱石教授のものであり、漱石アンドロイドについてのものでもある書架の整備を通して、研究室の方向性が次第に定まっていった。

アンドロイドと交流する空間

2021年秋からは、アンドロイドサークルが定期的に利用している。漱石アンドロイドをすぐに操作できる利便性の効果は大きかった。音声プログラムの作成や修正が容易になり、アンドロイドに対するメンバーの意識もより親密なものとなった印象がある。22年1月には朗読動画の撮影も実施することができた。国語教育の教材として配信することを目指して編集作業を続けている。

心理実験はまだ行えていないが、条件に柔軟に対応できるよう、室内装飾への目配りはさらにあってよい。ランプや筆立てなどを調達し、20世紀初頭のような雰囲気を作ることができれば、実験以外の活用でも選択肢が増えていくはずである。

従来のイベントは、漱石アンドロイドが外に出かける体裁であった。研究室の確保で、人が訪れるという形の機会を設けることが可能になった。例えば、オープンキャンパスに合わせて研究室を開放し、訪問者とやり取りする企画などが思い浮かぶ。一人で向き合った時に漱石アンドロイドが及ぼす影響は、これまで以上に多面的に見えてくるはずである。アンドロイドと人とが交流する空間から何が生まれるかを測り、また、新しいものを生み出す準備の場として、研究室はさらに発展していくことが予見される。

コロナ禍のアンドロイドサークル ――オンラインの可能性

二松学舎大学大学院文学研究科
助手　伊豆原 潤星

1、はじめに

前年度報告書のアンドロイドサークルの項に、2021年度は「停滞を取り戻すべく精力的に様々な活動を行っていく予定」と書いた。新型コロナウイルスの流行も多少落ち着き、サークル活動を進められるのではないかと希望を抱いていたためである。しかし、2021年度前半も、新型コロナウイルスの流行が収束することはなく、前年度に引き続き活動の縮小を余儀なくされた。2020年度に比べれば、大学の活動基準は緩和されたものの、サークルメンバーの多くが対面授業の免除申請を出していることもあり、サークル活動を積極的に行うことが難しい状況であった。そのような中でも、11月後半から週一度オンライン併用の形で活動を開始し、12月にはサークル説明会を実施、3名の新メンバーを迎えることができた。現在、アンドロイドサークルの構成は、1年生1名、3年生9名、4年生6名の計16名。2年生メンバーがおらず、次世代のメンバーを育成できていないことは、新型コロナウイルスの影響で活動が大幅に停滞したことも相まって、来年度の大きな懸念事項である。今年度は、少しでも来年度に襷をつなぐべく、可能な範囲で漱石アンドロイド研究室のレイアウトや、音声作成、動画撮影などに取り組んだ。本稿では、その取組みについて報告する。

2、LINEスタンプの売上

2019年12月にリリースした漱石アンドロイドのイラストLINEスタンプ「ゆるもち漱石アンドロイド」は、ペースは落ちたものの2021年度も緩やかに売れ続けた。2021年4月から2022年1月にかけての合計販売個数は40個、平均して月4個の売上があった。販売内訳を見ると、5月が一番多く売れており、10個売り上げている。これは、おそらく大学の新入生が購入したものと思われる。

2022年度は、実写版漱石アンロイドLINEスタンプのリリースを予定している。現在リリース中のスタンプにも実写を取り込んでいるが、そのスタンプの利用率が高いため、十分需要があると判断した。イラストスタンプは、漱石アンドロイドスタンプと銘打っているものの、実際は「夏目漱石」スタンプとして受容されている。「夏目漱石」の外見を精巧に模したものが「漱石アンドロイド」である以上、「漱石アンドロイド」をイラスト化すれば、「夏目漱石」として受容されてしまうのは半ば必然的なねじれといえよう。その点、実写スタンプは、そのまま「漱石アンドロイド」として受容されることになるだろう。漱石アンドロイドの写真は、サークル発足以来4年間分の蓄積がある。それらを利用し、年度前半にはリリースしたい。

3、漱石アンドロイド研究室

2021年度から、漱石アンドロイドは二松学舎大学1号館10階の1004研究室に置かれている。ここは、本来は文学研究科長室だが、山口直孝研究科長が漱石アンドロイド研究プロジェクトのリーダーであるため、漱石アンドロイドおよびサークルが利用している。将来的には、夏目漱石の書斎風にレイアウトし、外部からの訪問者を応対できるような部屋にすることが目標である。

1004研究室は、10階の一番奥の部屋で、他の研究室と比べると細長い構造を持つ。それゆえ、奥に操作ブースを設け、パーティションを置き、手前に漱石アンドロイドを置くことが容易にできる。この部屋の構造上の問題点は、(図1)を見れば分かるように、部屋の2面が窓になっている点である。北向きのため、高温になることは少ないが、漱石アンドロイドがある程度紫外線に曝されることになる。アンドロイドのスキンへの紫外線ダメージは避けられない。現在、漱石アンドロイドは、紫外線を90%カットするポリエステル素材の布で包んだ上で、脚付きホワイトボードの影になる場所に置いているが、これでも多少のダメージはあると思われる。今後、窓に遮光カーテンを設けることも考えなければならないだろう。

（図1）1004研究室

また、電力の問題点もある。漱石アンドロイドは、身体を動かすエアーコンプレッサーと、操作するPC類を同じ系統のコンセントから取ることができない。電圧の問題で、不具合が発生する可能性が高くなるためである。そのため、エアーコンプレッサーの系統と、PC類の系統の2系統が必要だが、1004研究室は、コンセント自体は複数あるものの、全て同じ系統なのである。したがって、電源延長コードを用いて部屋の外から電気を持ってくる必要がある。ただ、この部屋は端に位置しているため、外から延長コードを引っ張ってくるのが難しい。当初は気づかなかったが、年末に長時間動かした時に不具合が発生して明らかになった問題である。まだ解決策は出ておらず、別の方法を模索している。

部屋のレイアウトは、夏目漱石の書斎を想起させるものを目指している。新宿区立漱石山房記念館には、実際の漱石の書斎を、残っている写真や訪れた人の証言などを踏まえて再現した展示室があるが、部屋の間取りが大きく異なるため、そのまま参考にすることは出来ない。したがって、漱石の書斎そのものではなく、訪れた人が「漱石の部屋として違和感がない」と感じるような「漱石らしさ」を持つ部屋が理想である。

対面活動が中々できないこともあり、レイアウトは遅々として進んでおらず、現在は、本棚のレイアウトの一部が完成した状況である。本

棚は、小説家の部屋である以上、核となる部分であり、まずはそこから手を付けた。(図2)は、本棚の当初の状態である。本棚は全研究室共通の据え置きのスチール製の本棚で、耐震対策で壁に固定されており、動かすことができない。そのため、この本棚を活かして夏目漱石の書斎風を演出しなければならない。対処法として、サークルメンバーと話し合い、木目調のマスキングテープを貼って、木製本棚のように見せるという方法をとることにした。貼った後が、(図3)である。よく見ればシールであることが分かるが、一見分からないのではないか。入り口手前の2台は貼り終えており、あと1台貼れば完成である。奥の2台は、パーティションで隠すため、手を加える予定はない。

（図2）テープを貼る前の本棚

（図3）テープを貼った後の本棚

本棚を完成させても、どのような本を並べるのかという問題が残されている。夏目漱石の蔵書約3000冊は、現在東北大学に「漱石文庫」として残されており、蔵書類は現在入手可能な範囲内で再現可能である。漱石文庫に準拠し可能な範囲で本を収集するか、あるいは漱石全集や弟子の全集などを並べるかどうか、今後の検討課題である。

雰囲気を出すための調度品についても、購入する予定である。まずは床に絨毯を敷きたい。漱石本人も書斎に絨毯を敷いていた。絨毯といっても本物の骨董品ではなく、アンティーク風のもので問題ない。ネットショップなどで安く購入可能である。また、テーブルおよびランプも購入したい。漱石は絨毯の上に座布団を敷いて座り、紫檀の座卓に向かって過ごしていた。照明は、座卓の上に吊り下がったペンダントライトのみであった。その状態を再現したいが、漱石アンドロイドは、構造上椅子から下ろすことができない。そのため、漱石アンドロイドの場合は、アンティーク風の木製テーブルの卓上にガラス製のランプ等を置くことで雰囲気を出したいと考えている。漱石のテーブルに関して、アリナミン製薬が販売している「アリナミンEX」の、偉人をモチーフにしたCM「疲れ目サイクル　夏目漱石篇」は興味深い事例である。このCMは、執筆で目がつかれた夏目漱石に対して「アリナミンEX」を勧めるという内容だが、CM内で、漱石は椅子に座ってテーブルに置いたランプの照明を頼りに原稿を書いている。このCMは、夏目漱石に対して人々が抱いている執筆イメージを図らずも反映している。椅子に座って卓上ランプの明かりで執筆するという史実と異なる姿に対して、多くの人は違和感を抱かないということである。我々が、漱石の書斎としてテーブルとランプを置いても、「漱石らしさ」は損なわれることはなく、むしろ「漱石らしさ」を補強することにつながるのではないか。どのようなテーブルとランプを購入するのかはまだ定まっていないが、「漱石らしさ」を意識しつつ選定していきたい。

4、音声・動画作成

2021年度のサークルの新規活動として、You Tubeにあげる朗読動画の作成に取り組んだ。当初から目標に掲げていたものの、なかなか着手できていなかった活動である。今回、取り組んだのは、『こころ』および『夢十夜』「第三夜」「第六夜」の3本。中学高校の授業で扱われることが多い『こころ』と『夢十夜』を選定した。『こころ』および『夢十夜』「第三夜」の音声は作成済だったため、今回は微調整を加えただけで、今年度新たに作成したのは、『夢十夜』「第六夜」のみである。「第六夜」の音声作成にあたっては、自宅からオンラインで授業を受けているメンバーが多いので、新たな試みとして「zoom」を用いた対面オンライン併用活動を行った。方法は、漱石アンドロイドの音声作成ソフトが入っているPCはネットに接続できないため、キャプチャデバイス「ATEM mini」を経由して別のPCに音声および映像を送り、それを「zoom」で共有するというものである。対面オンライン併用によって、平日だけでなく、土曜や日曜にも作業を進めることができ、短い期間に音声を完成させることができた。対面オンライン併用の思わぬ効果は、卒業生が参加してくれたことである。卒業生が在校生にアドバイスをしたり意見を言ってくれることで、作業が円滑に進んだだけでなく、在校生のスキル向上にもつながった。後進育成のためにも、今後も対面オンライン併用で活動を行い、先輩と後輩が交流できる環境を維持していきたい。

動画撮影は中洲記念講堂で行った。理想は複数台のビデオカメラで撮ることだが、機材や人手の問題もあり断念し、一台のビデオカメラで撮影した。照明は講堂備品のピンスポットライトを利用し、漱石アンドロイドの顔が明るく見えるよう工夫している。背景は講堂のカーテンを背景にしたパターンと、グリーンバックを背景にしたパターンの二種類用意し、『こころ』『夢十夜』それぞれ二回ずつ撮影した。動画編集については、まだ完了していないが、2021年度中に第一弾として『こころ』をアップロードすることを目指している。

5、おわりに

2021年度は、You Tube動画作成という新たな試みに挑戦できただけでなく、新メンバーを迎え入れることができた。また、本稿では詳細について触れなかったが、大阪大学との共同実験にもスタッフとして参加した。わずかな期間とはいえ活動を行えたことは、サークルメンバーにとって有意義だったと考えている。先行き不透明だが、来年度は、漱石アンドロイドを用いたイベントをどのような形でも実施したい。また、新たな企画として、漱石アンドロイドのTwitterについてもサークル内で検討中である。来年度こそ、オンラインも活用しながら「停滞を取り戻すべく精力的に様々な活動を行っていく予定」である。

漱石アンドロイドの中からの視点

二松学舎大学文学部
学生（漱石アンドロイドサークル）　二木 潤

はじめに

私は今回、私自身が操作を担当したもののなかから、富山大での授業（2019年10月31日）、オープンキャンパス（2018年8月19日、9月23日、2019年8月18日、9月29日）、シンポジウム（2019年11月9日）、心理実験（2021年12月5日）、の四つのことを取り上げ、操作を通して気付いたことをまとめる。

まず、共通でいえる重要だと感じことは、漱石アンドロイドを見る人が、漱石アンドロイドというものを詳しく知っているとは限らないという点だ。

イベント終了後のアンケートや感想では、漱石アンドロイドにAIが入っていると思われているようなコメントが何度も見受けられた。

操作する側としては中に人がいるというのは当たり前であっただけに、詳しくない人も見ているという認識は疎かになっていた気がする。そのため、AIが動かしていると思っているような人相手でも機械的なものと感じさせないように操作するといった意識は必要だと考えている。

以上のことを踏まえ、先にあげた四つのことをまとめていく。

(1)富山大での授業に関して

富山大での授業で気付いた点は、漱石アンドロイドの眼力は思っている以上に強いということである。

普段操作をしている際には、漱石アンドロイドの眼に入っているカメラをもとに状況を判断していることが多い。そのため、漱石アンドロイドと対面している人からすれば、近づくと漱石アンドロイドの眼に追いかけられる、視線が自分に向き続けるといったことが起きている。

富山大学授業後のディスカッションで、「漱石に見られると緊張する」といったコメントがあった。状況としては、近づくことを促された人のコメントである。授業としてのものである以上、全員が全員漱石に興味があるとは限らない。そのため、普段イベント時などの興味を持っている人が自分から近づくのとはわけが違う。

それまではイベント時の写真撮影等、自分の意志で、自分から近づく人と接することがほとんどであった。そのため目線が向いていることを好意的に取られることが多かった。

だが、もとから好意的とは限らない人に対してであれば、生身の人間同士であったのならば感じるような、目線が自分に向き続けるのは不快、といった凝視されていることに対しての嫌悪感があってもおかしくはない。

人間同士でのことと同じような感覚が漱石アンドロイドにも当てはめられ、「漱石に見られると緊張する」といったコメントになったのだと考えられる。

以上のことから、近づく人には眼を向けるもの、といった機械的にパターン化された操作になってはいけないと感じた。見られていることに緊張感を感じる人がいる程度には眼力があることを理解し、場の雰囲気によっては、あえて目線を向けないようにする、といったことも必要になるのではないかと考える。

(2)オープンキャンパスに関して

オープンキャンパスを通して気付いた点は、操作者だけでは漱石アンドロイドを動かすことは成立しないということだ。

前述したように、操作している際には、漱石アンドロイドの眼に入っているカメラをもとに判断していることが多い。操

作者からの視点は漱石アンドロイドと同じであるともいえる。だが、漱石アンドロイドの首は稼働する角度に制限があり、見えない場所が存在する。そのため、状況判断には他の人の力を借りなければならない場面がある。

また、操作者からはわかりにくい漱石アンドロイドの不具合を見つけることができるなど、操作者とは別の視点持つ人が近くにいることは、漱石アンドロイドの状況を把握するのにも役立っている。

さらに、漱石アンドロイドにはマイク等収音機能がないため、漱石アンドロイドと操作者が離れるとその場の音も聞こえない。このことも、視覚同様他の人の力を必要とする要因になる。

以上のように、漱石アンドロイドから操作者が受け取れる情報に限りがあるため、漱石アンドロイドの近くから状況や指示を操作者に送ること人の存在は重要だと感じている。

このことは、トラブルや近くに来る観客の対応など柔軟な対応をしなければいけないことの多かったオープンキャンパスならではのことだと思う。

オープンキャンパス時によく行われていた、漱石アンドロイドとの写真撮影では、写真を撮る際にどのカメラに目線を向けさせるか、どちら側から人が回ってきているかなど、予め決めることのできないことがある。そういった時にも、機械的な対応にならずに操作ができたのは、近くから指示を出す人がいるからこそであると感じている。

(3)シンポジウムに関して

シンポジウムを通して気付いた点は、待機時の挙動は自然であるということだ。

漱石アンドロイドはエアーを動力としているため、何も操作を入力していなくとも(待機時)、本体が揺れる、首が上下に跳ねるような動き等が起きる。これらの動きは抑えようがない動きであり、不規則に起きるものである。

普段の操作では、不規則な動きであるため、なるべくわかりにくくなるように操作をしていた。だが、シンポジウムの際には漱石アンドロイドが壇上に出ずっぱりであり、常に操作をしているというのは難しかった。そのため、登壇者の話を聞いている体、そう見えるように操作をしていたが、操作が追い付かない場合、待機時の挙動が見えるものとしてでていた。

ある程度は不自然であっても仕方がないと考えていたのだが、そういった指摘や、普段見ている人からも、何か違和感を感じた、といったようなこともなかった。

生身の人間であっても身じろぎといったことはしているため、漱石アンドロイドが多少動いたからと言って何か感じるといったことはなかったのではないかと考える。むしろ、全く身じろぎもしないといったことの方が、機械的なものとして違和感になったのではないかとも考えられる。

以上のように、待機時の挙動は特段抑える必要があるようなものではない、ということが考えられるため、うまく活かせればより楽に、自然に操作ができるのではないかと考える。

(4)心理実験に関して

心理実験を通して気付いた点は、人によって印象が大きく異なるという点だ。

心理実験の際には、条件を変えないため可能な限り同じになるように操作をしていた。もちろん回答によって分岐するなど異なる点もあるが、それ以上に、終了後のアンケートなどでは漱石アンドロイドに対する印象は人によって大きく異なる。

同じようにやっていても受ける印象が異なるのであれば、見る人がどのように感じるかを踏まえ操作するのは難しいのではないかと思う。そのため、自分がどう見せたいのかという意識のもと操作する方が良いのではないかと考える。

最後に

以上四つのことをまとめてきたが、どれも操作の回数をこなすことで覚えていったことであり、感覚的な部分も多くある。そのため、操作を覚えるには数をこなすしかないのではないかと、操作を担当させてもらった身としては感じている。

「漱石アンドロイド」プロジェクト　2021年度　共同研究報告書
2022年3月31日初版第1刷発行

編集兼発行者　二松学舎大学　漱石アンドロイド運営委員会

印刷社　株式会社　サンワ

発行所　東京都千代田区三番町6-16
二松学舎大学
TEL：03-3261-7407　FAX：03-3261-1291
URL：https://www.nishogakusha-u.ac.jp/

二松學舍大學
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY

大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

ATR
Advanced Telecommunications Research Institute International

学校法人二松学舍

〒102-8336 東京都千代田区三番町6番地16　TEL 03-3261-7407